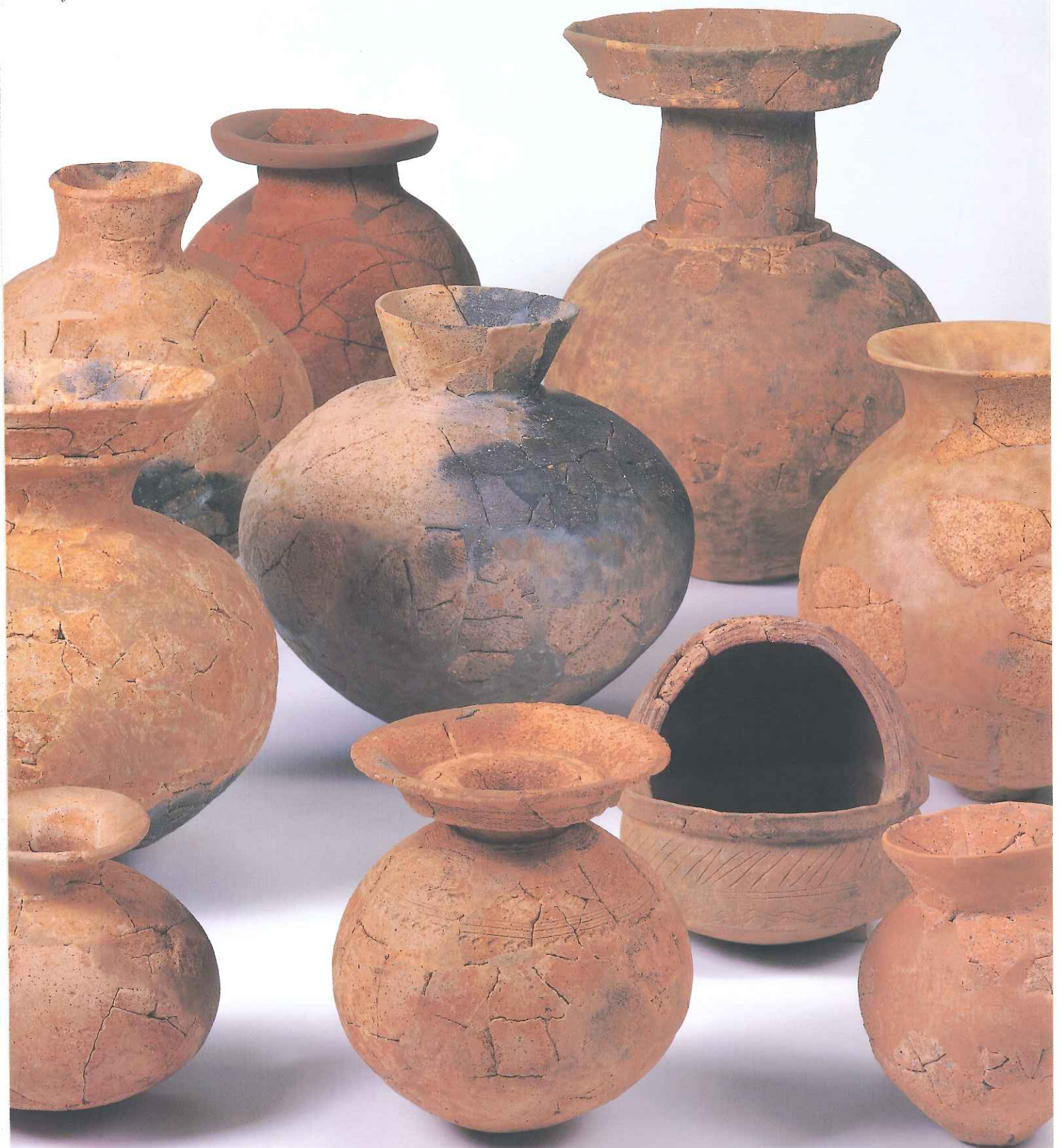


# 若林遺跡発掘調査概報

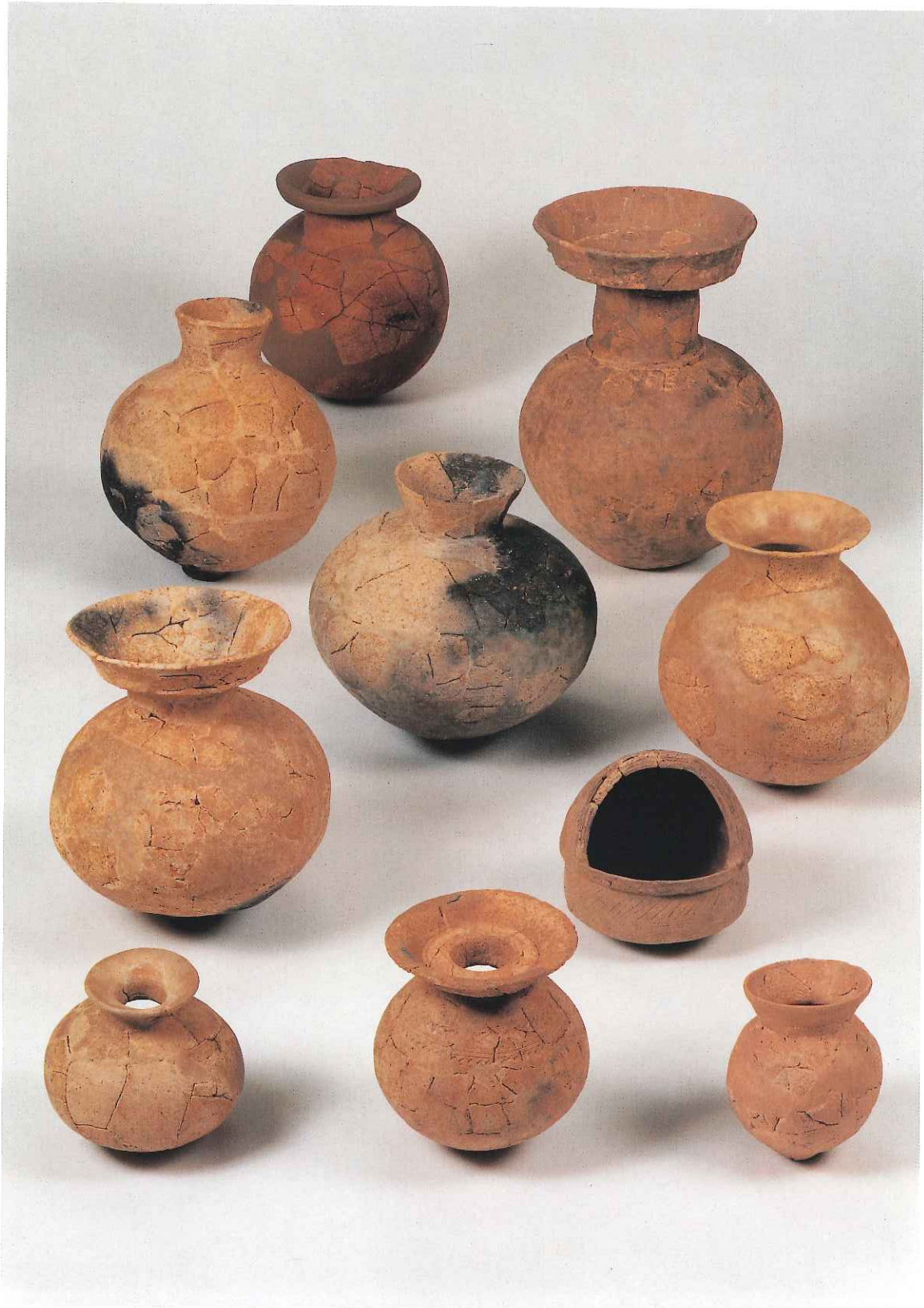


1998  
宇治市教育委員会





方形周溝墓全景（手前がS X201、奥がS X202）



出土土器集合写真

## 序

近年、宇治市では、宅地開発や道路建設が相次ぎ、それに伴う埋蔵文化財の緊急発掘調査が増加しています。

本書は、宇治市教育委員会が開発事業に伴って発掘調査した若林遺跡2件の概要をまとめたものであります。

若林遺跡は、ここ数年間の相次ぐ緊急発掘調査によって、しだいに遺跡の実態が明らかになってきており、弥生時代中期から奈良時代にわたる遺構・遺物が確認されています。

今回発掘の成果もこれまで以上に多大な成果を収めることができました。調査成果の詳細は後述するとおりですが、丘陵上に方形周溝墓2基・古墳1基を主に検出し、伊勢田地域における古墳時代の実相がかなり鮮明になってきました。さらに古墳の周濠内からまとまって出土した土器群の有様は、古墳時代における葬送儀礼の姿を復元する上で極めて重要な情報を提供してくれました。

本書が多くの方々を目にとまり、広く宇治の歴史を知る機会となり、文化財保護に役立つことを願うものです。

最後になりましたが、調査にご協力いただいた開発業者の方々を始め、また調査期間中に御指導・御助力を賜りました関係各位に対して心よりお礼を申し上げます。

平成10年3月

宇治市教育委員会

教育長 谷口道夫



## 例 言

1. 本書は、宇治市埋蔵文化財発掘調査概報の第40集である。
2. 本書は、平成9年度に本市教育委員会が開発事業に伴って実施した若林遺跡の発掘調査2件をまとめたものである。

名 称	調 査 地	調査原因	経費負担者	調査期間	調査面積
若林遺跡	伊勢田町大谷 22他	共同住宅建設	睦備建設(株)	H9.2～8	3,000㎡
	伊勢田町若林 14-1 他	共同住宅建設	天野 富三	H9.6～7	110㎡

3. 本書で使用する方位はすべて磁北である。
4. 本書が収録する発掘関係資料は宇治市教育委員会が保管・管理している。
5. 本発掘調査事業に関する機関・体制は下記のとおりである。

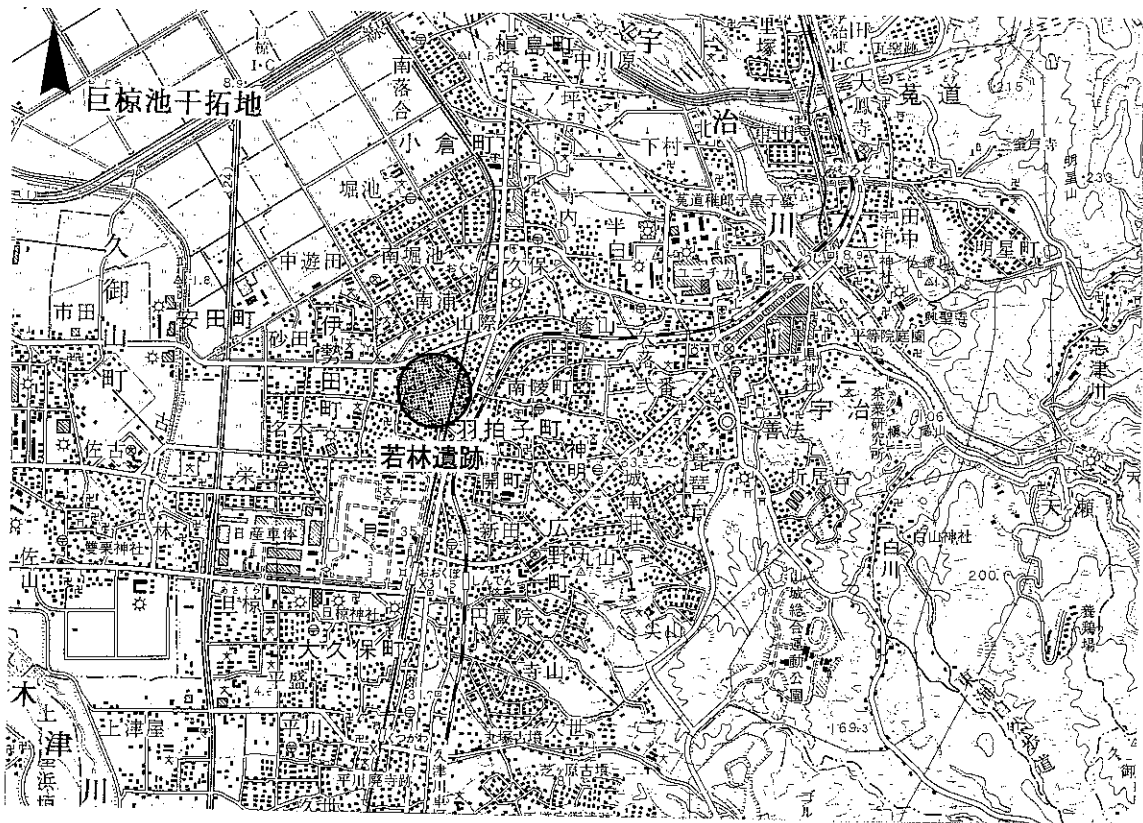
発掘主体者	宇治市教育委員会			
発掘責任者	宇治市教育委員会	教育長		岩本昭造 (～9.10.12)
				谷口道夫 (9.10.13～)
	同	社会教育課	文化財保護係 主事	荒川 史
	同			浜中邦弘
	同		嘱託	吹田直子
発掘事務局	宇治市教育委員会	参事		岡本茂樹
	同	社会教育課	課長	小西吉治 (～9・10・15)
	同	社会教育課	文化財保護係長	吉水利明
	同	社会教育課	主任	日原洋子
調査参加者	調査補佐員	松村英之		
	調査補助員	宮崎一弥、荒木浩一、中村幸代		
	調査整理員	足立千春、坪井啓子、北沢英子、水口典子、久保千恵子、 今西礼子、黒石昌代		

4. 本発掘調査の実施期間中に下記の方々から専門的な御指導・御教示ならびに御協力をいただいた。順不同・敬称略。

杉本厚典（京都大学大学院生）、長朋友子（立命館大学大学院生）、鷹野一太郎（京田辺市教育委員会）、小泉裕司（城陽市教育委員会）、波部健（宇治田原町教育委員会）、加藤晴彦（加悦町教育委員会）、肥後弘幸・岸岡貴英（京都府教育委員会）、古閑正浩（大山崎町教育委員会）、藤田有紀（仏教大学）、京都大学考古学研究室学生、財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター

5. 本書の編集は、宇治市教育委員会社会教育課文化財保護係が行い、実務を浜中邦弘が行った。本書の執筆分担は下記のとおりである。

I・II・III・IV-A, B・V・VI	……………	浜中 邦弘
IV-C	……………	吹田 直子
付 論	……………	松村 英之



若林遺跡の位置（1：50,000）



## 本文目次

I	はじめに	1
II	位置と環境	2
III	過去の調査	4
IV	5次調査	9
	A. 調査の経過	9
	B. 検出遺構	11
	C. 出土遺物	24
V	6次調査	29
	A. 調査の経過	29
	B. 検出遺構	31
	C. 出土遺物	33
VI	まとめ	34
	註)	35
	付論「遺物の出土状況は何を語るか—周溝内出土の土器から—」	37

## I はじめに

ここに報告をするのは、宇治市伊勢田町大谷22番地他（5次調査）と若林14-1番地他（6次調査）の2カ所で実施した若林遺跡発掘調査の成果概要である。

若林遺跡は、旧巨椋池の南辺、宇治丘陵西北端部の伊勢田町若林・大谷地区一帯に展開する遺跡である。若林遺跡は比較的古くより把握されていた遺跡で、伊勢田神社を中心に採集された土師器・須恵器から古墳時代の遺跡が想定されていた。伊勢田神社は『延喜式』に記載される式内社で、古くは『山城国風土記』逸文に「伊勢田の社」としてみえる古社である。

伊勢田町一帯には若林遺跡以外にも遺跡が数多く点在するが、その大半が未だ実態が明らかではなく、巨椋池南岸における古代以前の歴史的・地形的な景観はよくわかっていない。

近年、若林遺跡では開発が相次ぎ、それに伴う発掘調査によって遺跡の実態がかなり明らかになってきた。



第1図 若林遺跡付近上空写真（上が北方向）



## II 位置と環境

### A 地理的環境

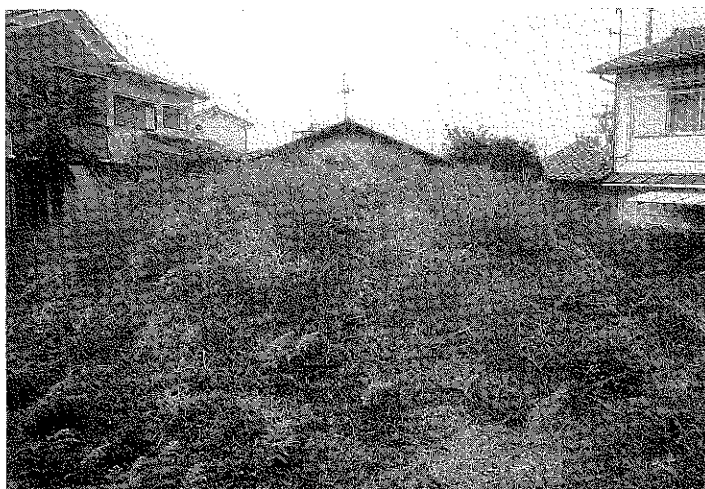
若林遺跡は、東から西に向かって緩傾斜する宇治丘陵の西北端部、丘陵と平野部の境（低位段丘）上に位置する。遺跡は西側には木津川により形成された沖積地が広がり、昭和7年の干拓時直前における巨大淡水湖巨椋池の汀は、北方1km程と極めて近い所に位置する。立地的にみれば若林遺跡は巨椋池と密接な繋がりをもちながら存在した遺跡として理解される。

### B 歴史的環境

若林遺跡周辺では、弥生時代から中世にかけての遺跡が数多く確認されるが、実態が判明してきている遺跡は極めて少ない。

弥生時代では、若林遺跡の北北東1.5km程に位置する神楽田遺跡、巨椋神社東遺跡で弥生中期から後期にかけての弥生土器が見つかっている。これらの遺跡の立地は巨椋池南岸付近に想定され、巨椋池のほとりに展開、巨椋池を生産基盤とした集落であったと思われる。宇治市内では、宇治川谷口両岸部の乙方遺跡と平等院下層（塔の川遺跡）で弥生時代の遺構・遺物が顕著に見つかっている。宇治川岸部に展開する集落である。

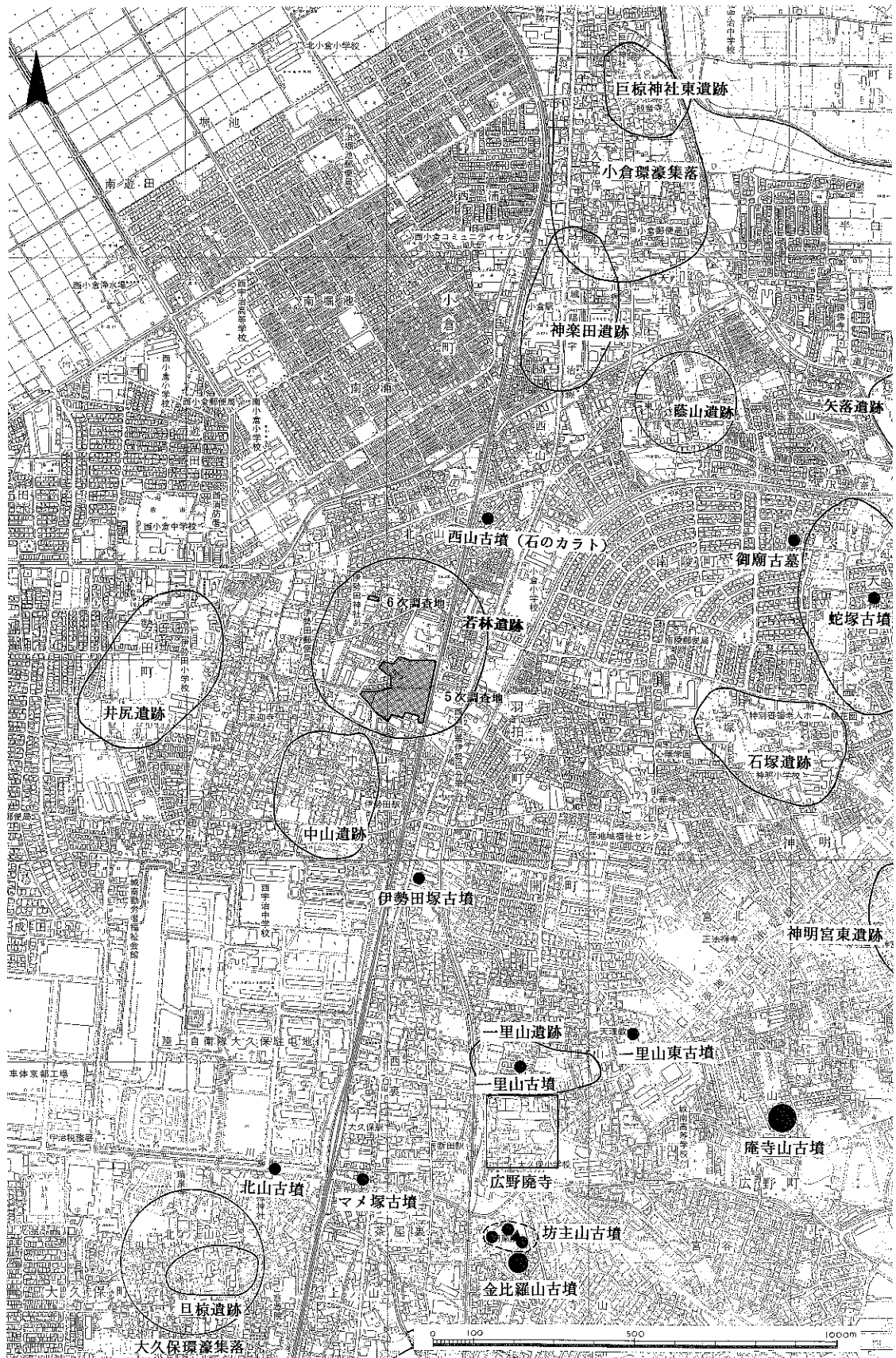
古墳時代では、若林遺跡の南約2km地域に車塚古墳や芭蕉塚古墳を始めとする大型前方後円墳が集中して築造される。久津川古墳群である。若林遺跡周辺では北約0.5km地点に西山古墳、南約0.5km地点に伊勢田塚古墳がみられる。西山古墳は、「石のからと」と伝承される古墳で、住宅街の一角に単独1基で存在する。現状では、直径12m、高さ2m程を測り、伝承名から類推すれば、古墳には葺石が葺かれていたものと思われる。また立地状況から、単



第2図 西山古墳（石のカラト）

独墳というよりも群集墳の1つである可能性が高い。伊勢田塚古墳は、棺底をもたない合口式の土師質亀甲形陶棺である。二段墓壇で、棺台は地山を削り出して造り出され、その上に陶棺を設置するもので、全国的にもきわめて珍しい。

7世紀後半に若林遺跡の南約1km地域に広野廃寺が創建される。発掘では築地跡や井戸跡などが見つかっている。



第3図 調査地周辺の主要遺跡



### Ⅲ 過去の調査

若林遺跡では比較的早くから伊勢田神社付近で土師器・須恵器片が採集されており、古墳時代の遺跡として理解されてきた。

発掘調査は、宇治市教育委員会と財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターによってこれまで計4回実施している。

#### 1次調査（平成2年度・第4図）<sup>1)</sup>

宇治市教育委員会による伊勢田町14・15-1番地での丘陵上の調査。伊勢田神社の北東隣接地。調査の結果、古墳時代後期の古墳（一辺14m）、土壇墓などを主に確認した。遺物では土壇内より出土した滑石製紡錘車が注目され、その他では凹基式と平基式の打製石鏃（サヌカイト製）が1点ずつ出土している。調査成果をまとめると、若林遺跡の始まりは弥生時代後期頃で、古墳時代に入って古墳や土壇墓が形成される古墳群として展開していくことが理解された。

#### 2次調査（平成5年度・第5図）<sup>2)</sup>

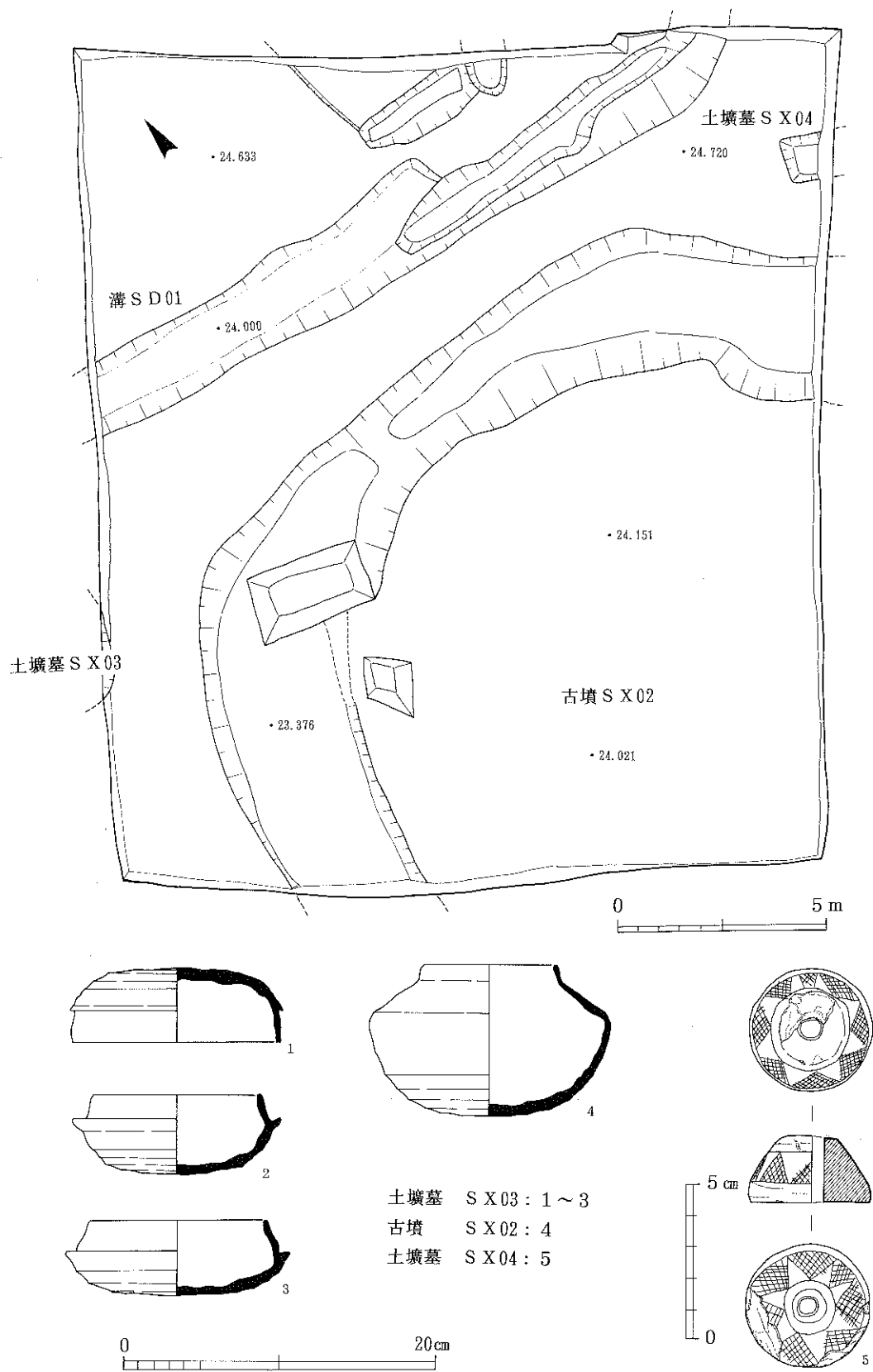
京都府埋蔵文化財調査研究センターによる伊勢田町若林33番地での丘陵裾部の調査。調査の結果、掘立柱建物、竪穴住居、土壇、溝などを検出した。遺物では奈良時代の円面硯とサヌカイト製の削器が注目された。主な成果としては奈良時代の集落跡が明らかとなったことであり、丘陵上には墓地、その裾部から西の平野部に向かって集落が展開する可能性が考えられるようになった。

#### 3次調査（平成7年度・第6図）<sup>3)</sup>

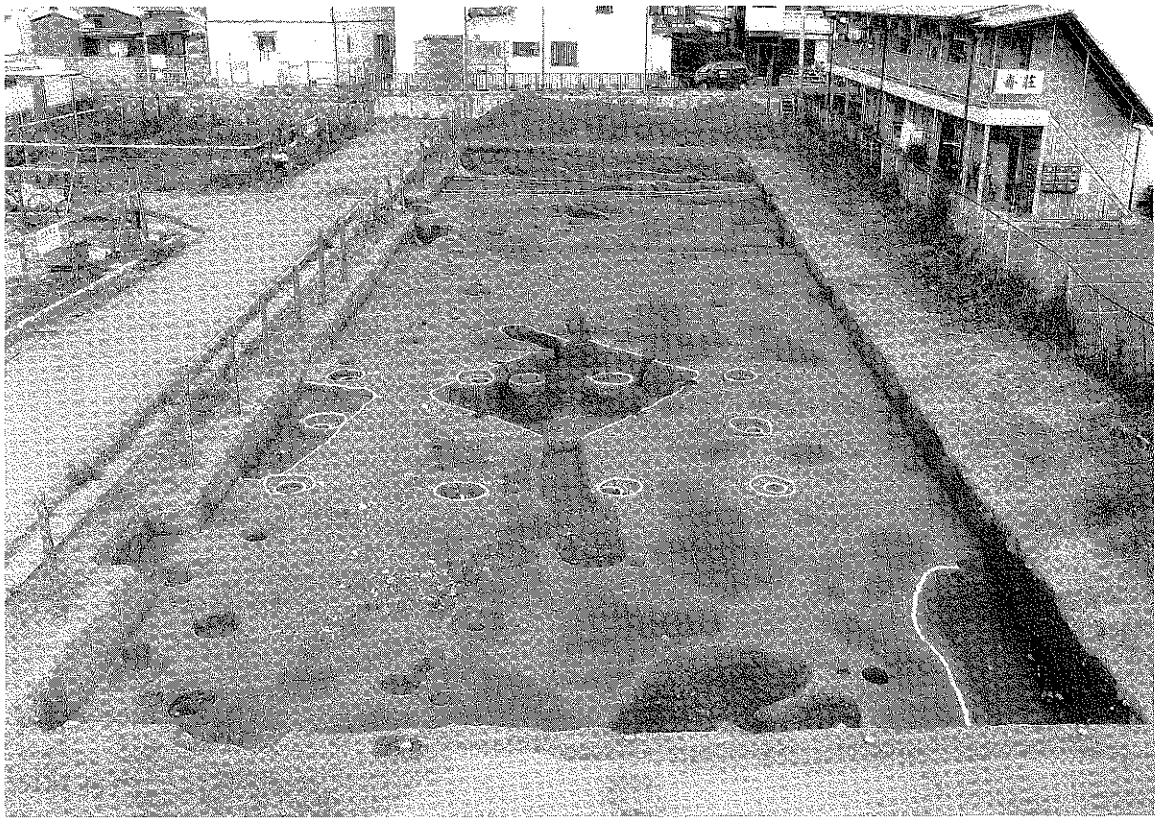
京都府埋蔵文化財調査研究センターによる伊勢田町若林33番地での丘陵裾部の調査。2次調査の北隣接地。調査の結果、掘立柱建物、土壇、溝、柵列などを検出した。主な成果としては弥生時代中期に比定される柵列・土壇で、土壇内より出土した弥生土器片が廃棄の様相を示すことから付近に弥生時代中期の集落が展開する可能性が強くなった。

#### 4次調査（平成7年度・第7・8図）<sup>4)</sup>

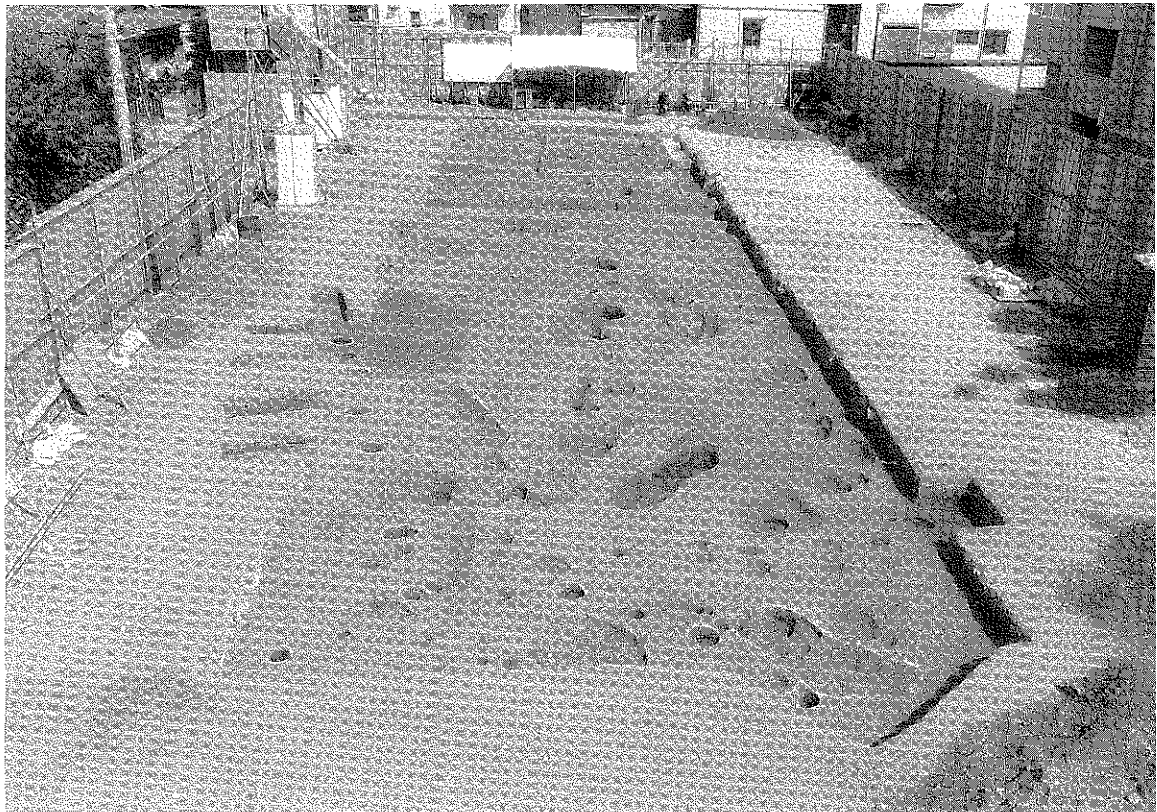
宇治市教育委員会による伊勢田町大谷38-1番地他での丘陵上の調査。調査の結果、方形周溝墓1基と土壇墓1基を主に確認した。この調査で注目すべきは、土壇墓で、床面下部構造は礫を敷き詰める等精巧に造っているにもかかわらず、その上部構造は簡略で、木棺はなく、木蓋だけという極めて特色ある構造となっていた。出土遺物には、2連にまとめられる玉類、刀子・竪櫛などがあり、それらがほぼ原位置をとどめて出土したことから、各遺物をもつ属性を理解する上で極めて意義ある資料となった。



第4図 1次調査検出遺構平面図・出土遺物実測図



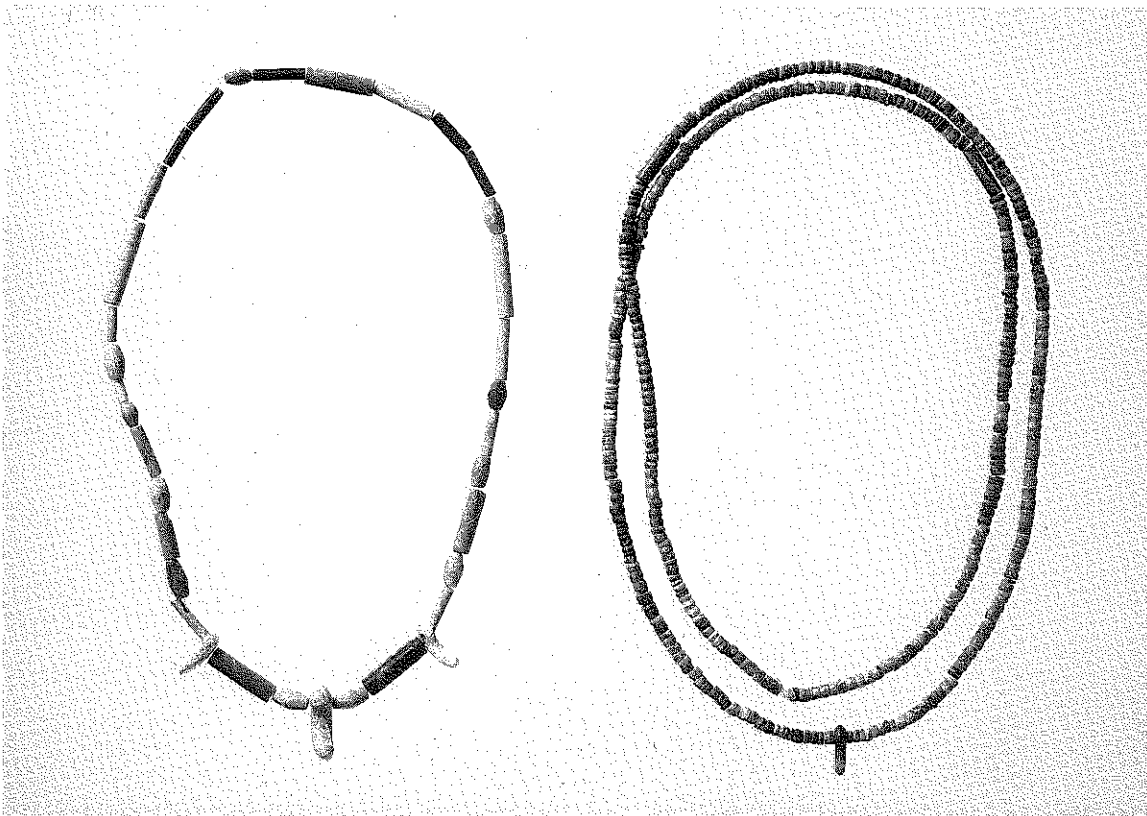
第5図 2次調査地全景（東から）… 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター提供



第6図 3次調査地全景（西から）… 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター提供

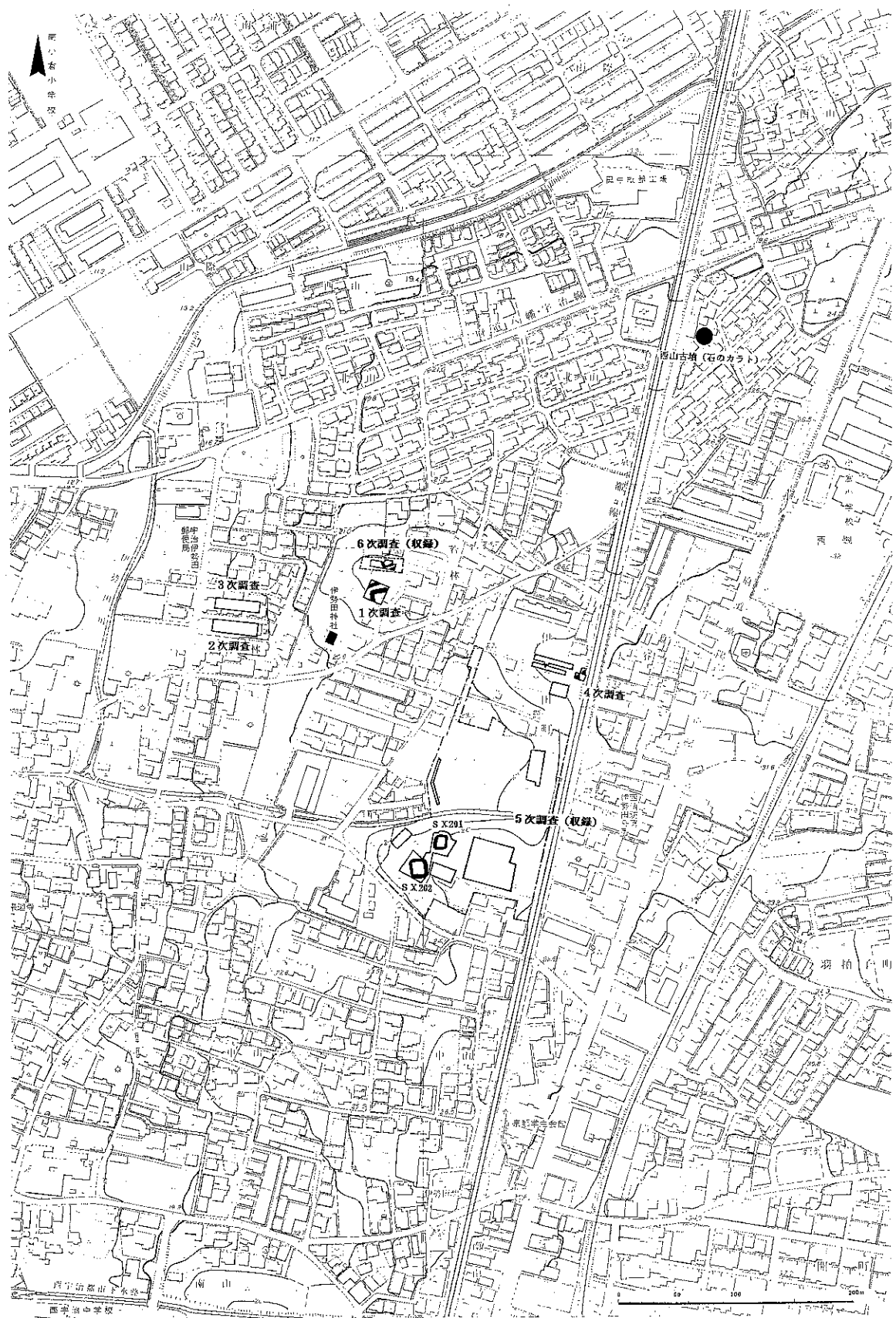


第7図 古墳時代中期の土壙墓S X01（南から）…4次調査



第8図 土壙墓S X01出土の玉類…4次調査





第9図 若林遺跡発掘調査地点図

## IV 5 次 調 査

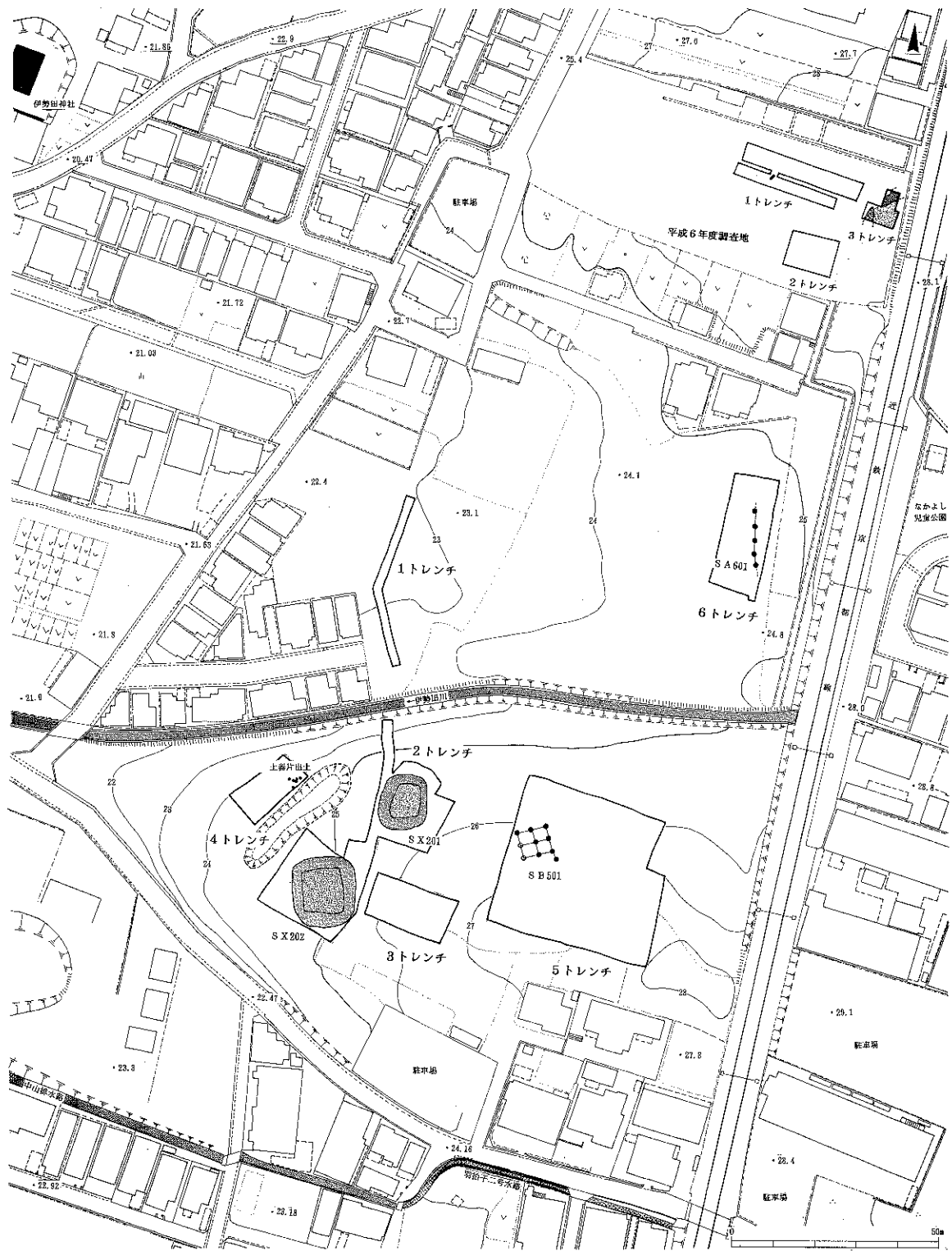
### A 調査の経過

調査地は、伊勢田神社の北東約200m、近鉄京都線の西沿いに位置する。当地は東から西に派生する宇治丘陵が分岐した小丘陵の末端部にあたる。調査地は、北側が丘陵間に形成された小さな谷であり南側は丘陵となっている。調査前の現状は、大半が竹林であり、一部を畑地・梅林として利用していた。周囲の地形状況等から判断して、調査地内の地形状況は比較的旧地形を踏襲しているものと考えられた。

調査は、作業効率を考え、開発に伴う竹林伐採と伐根を行った後、工事用道路の敷設予定地となっている地域を中心にトレンチを計4カ所設定して遺構の有無を目的とする作業を開始した。谷あいには設定した2つのトレンチでは、河川の堆積層が確認できたのみであった。遺物はほとんど含まれていなかった。調査地南側の丘陵端部に設定したトレンチでは、「L」字状に屈曲が認められる大溝と土壇状の遺構が確認された。いずれも掘削していくと、埋土中に遺物が比較的まとまった状態で出土した。遺物の内容から、これらは方形周溝墓の周溝部になる可能性が想定された。開発業者の希望で、最初に工事用道路の設置箇所の調査を迅



第10図 試掘トレンチの状況（北から）



第11図 5次調査周辺地形図

速に進めることとなった。前述したようにその地区には、方形周溝墓の存在が想定されるため、緊急を要する調査となった。まずはその地区を充填的に人力によって調査を行った。その結果、方形周溝墓の周溝部として確認し、計2基の存在を明らかにした。土器は周濠内に

部分部分に比較的まとまった状態で出土した。時間がないうえに迅速に調査を行い、遺構・遺物の詳細なデータを可能な限りとり、最善の努力をもって調査を行った。最後に全体の遺構写真をとることによって記録の作成を終了、この地点の先の明け渡しを行った。次にその他のトレンチを設定し、作業を開始したものの、その後は顕著な遺構は確認されなかった。



第12図 方形周溝墓 S X202の調査風景

遺構が完掘段階に入ってから、トレンチの位置図・遺構の平面図・土層断面図を作成、遺構の写真撮影等を行って記録を作成し、それらが終了することによって発掘調査の現場業務を完了した。発掘調査面積は計3,000㎡となった。

## B 検出遺構

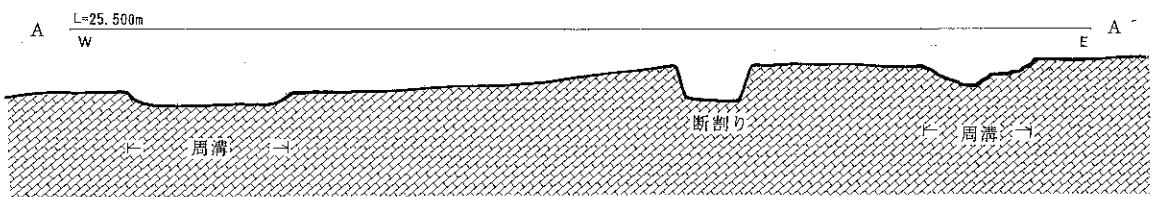
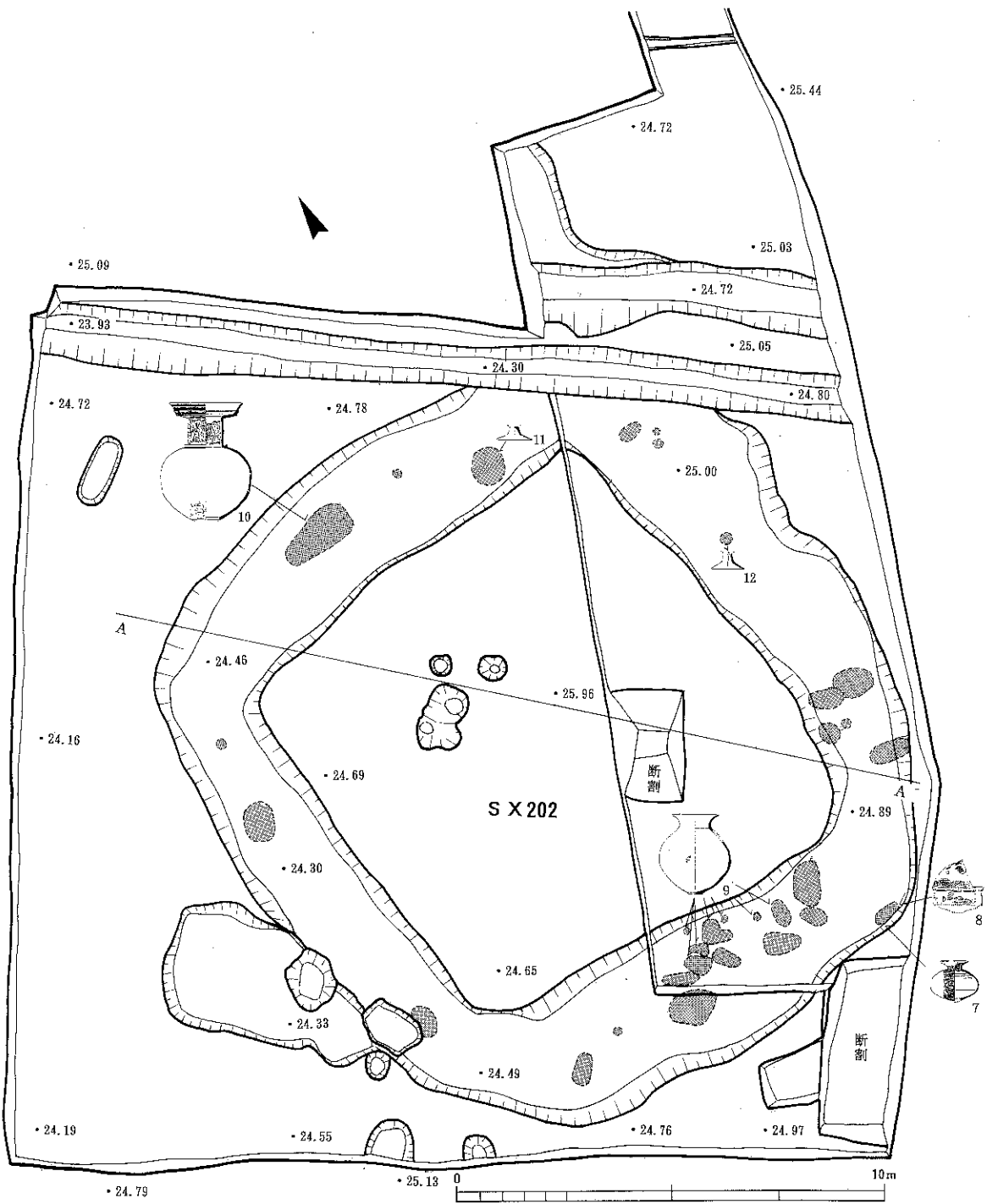
今回の発掘調査では計6カ所にわたるトレンチ設定を行った。調査対象地が広範囲にわたるため、全体の様相が明らかになるようなトレンチ設定を行った。地形的には大きくは北（谷筋）と南（丘陵）の2つに分かれ、遺構の形成はその南側丘陵上に展開していることが明らかとなった。丘陵上に設定したトレンチは2・3・4・5トレンチで、その内遺構が主に検出されたのが2トレンチである。2トレンチから庄内期に想定される方形周溝墓2基（S X201・202）が検出された。

以下、遺構重要度の高いトレンチから順に検出された各遺構の概要を述べていく。

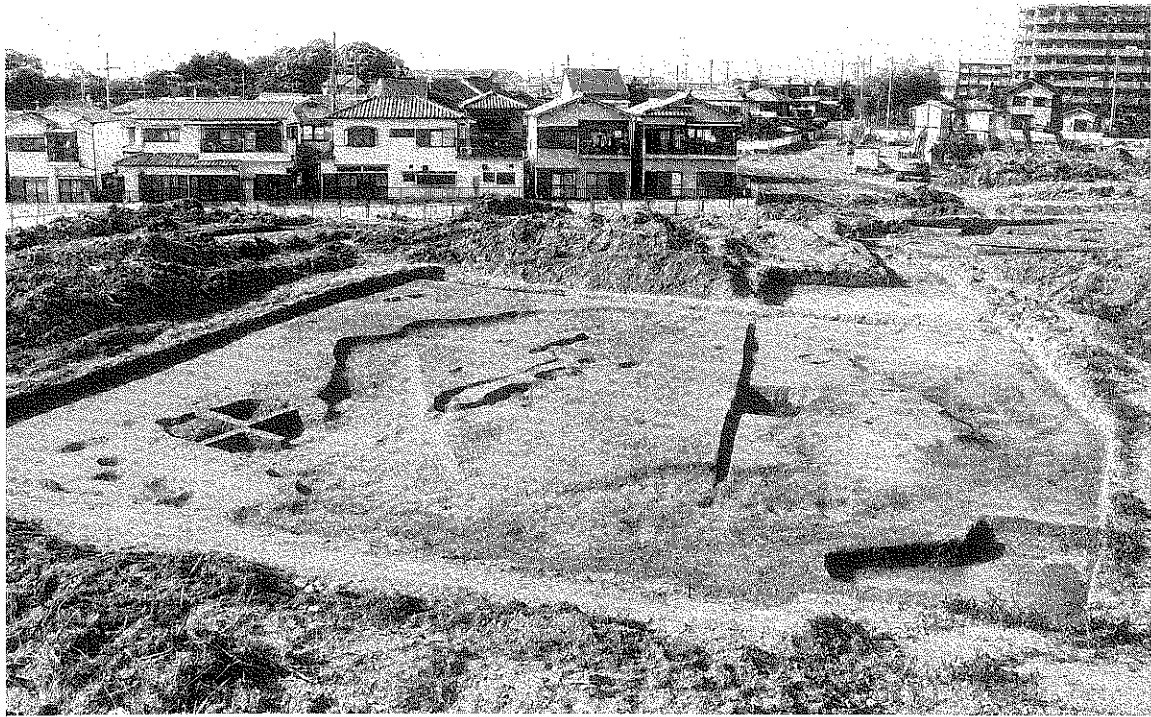
### 5 トレンチ（第13～25図）

方形周溝墓 S X202（第13～17図） 試掘調査時に方形周溝墓として理解されたものである。主体部に関連した痕跡は確認できなかった。墳丘部の現存直径は周濠の内側肩をもとに計測すると、概ね10.5mを測る。周溝は上端幅2.5～3m程、下端幅2～2.5m程、深さ20～30cm程を測る。周濠埋土の状況は、東西南北のそれぞれで確認した。北・西・南では褐色土の単一層を形成するが、東側だけは単一埋土の形成にはならず、3時期にわたる溝の変遷過程がみられた。遺構検出面は、現地表面から浅く開発に伴う造成において遺構が完全に消滅することから、墳丘の造成状況を確認するため、墳丘を漸移掘削していった。その結果、墳丘の西側は盛土造成が行われていたことが明らかとなった。すなわち東から西へなだらかに下がる緩斜面上の、低い西側部を盛土して墳丘全体の形を整えていったのである。周溝底の





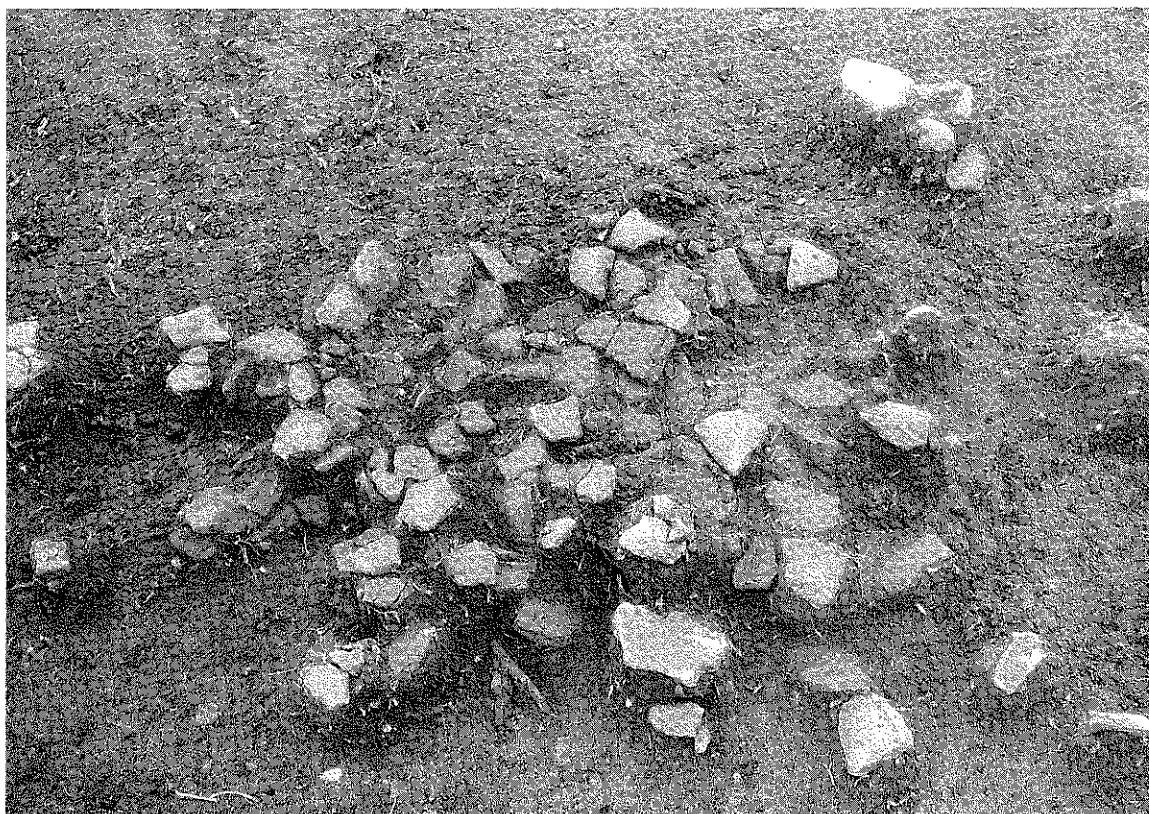
第13図 方形周溝墓 S X 202 実測図



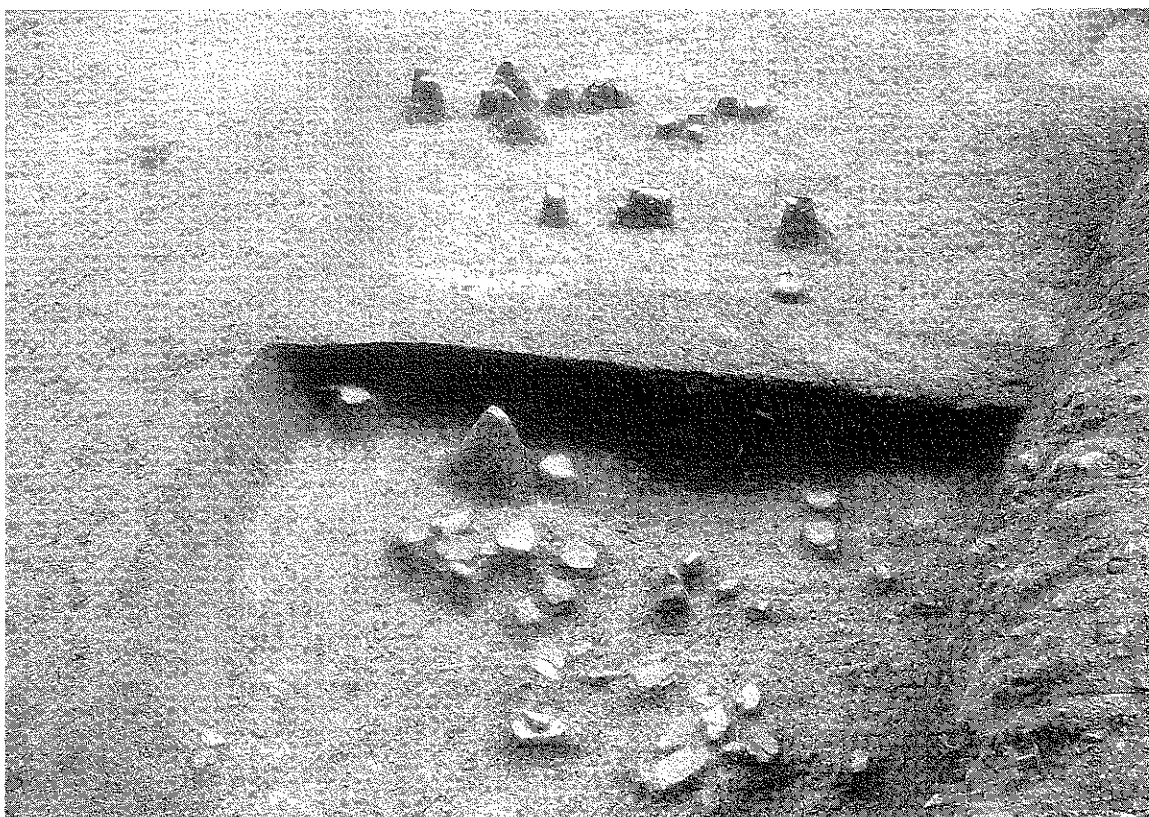
第14図 方形周溝墓S X202全景（西から）



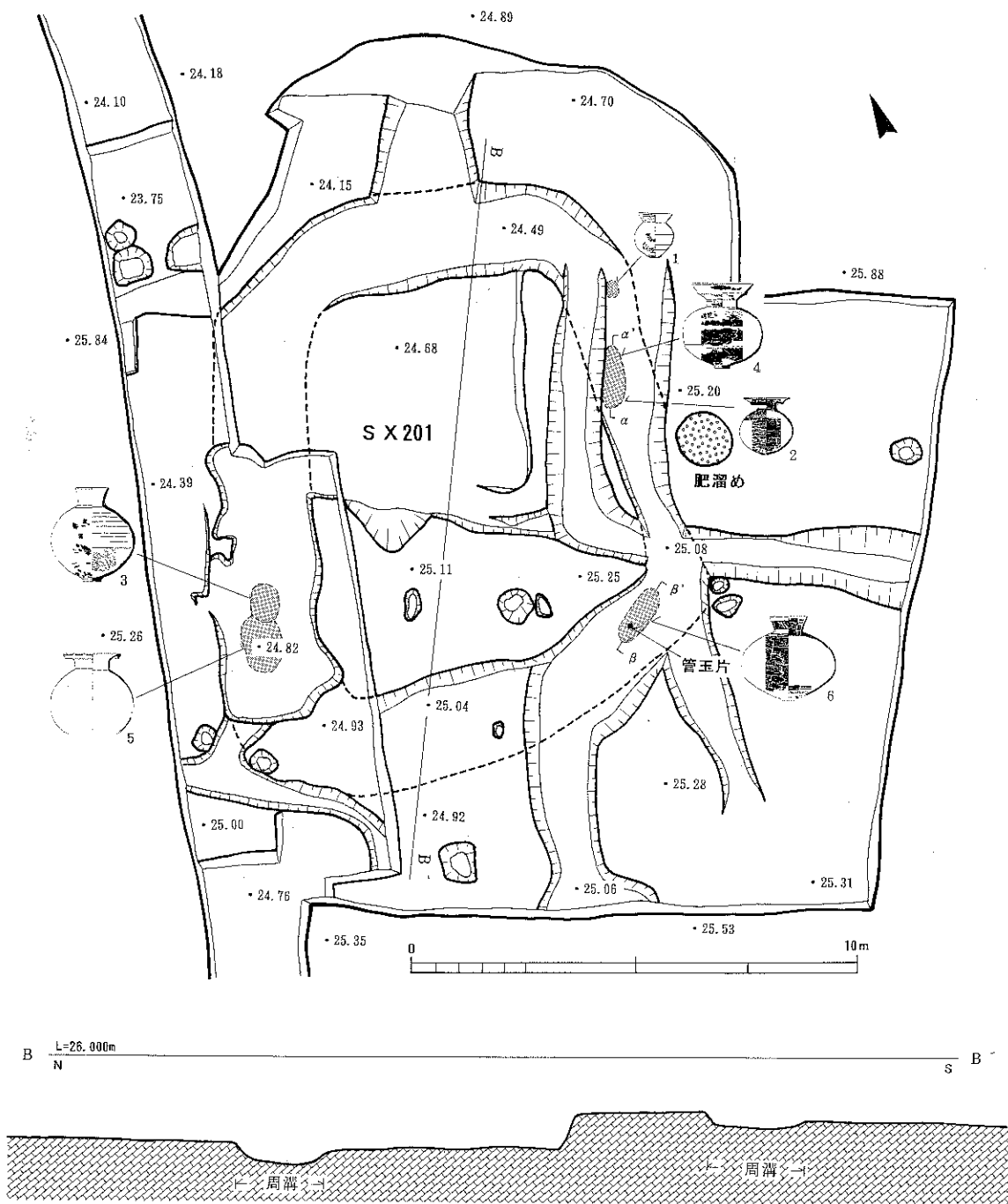
第15図 方形周溝墓S X202全景（南から）



第16図 方形周溝墓S X202北側周溝内の土器〔第34図10〕の検出状況（北から）



第17図 方形周溝墓S X202南側周溝内の土器〔第34図9〕の検出状況（西から）



第18図 方形周溝墓S X 201実測図

レベルは、地形と同じく、東から西へ低くなっている。周溝は当時の地表面を基準として一定の深さで掘削したような感がある。遺物は、周濠内の南側で比較的集中して出土した。

方形周溝墓S X 201 (第18~25図) この方形周溝墓は、出土した土器片の位置をもとにして認識復元できた遺構であり、全体的な遺構の残存状況は良くない。墳丘・周溝がそれぞれわずかながら部分部分に止めている程度である。想定される墳丘の平面形は、南側が裾広がり台形状を呈する。周溝部の幅は概ね全周同一幅が想定されることから、全体的な平面





第19図 方形周溝墓 S X 201 全景（北東から）

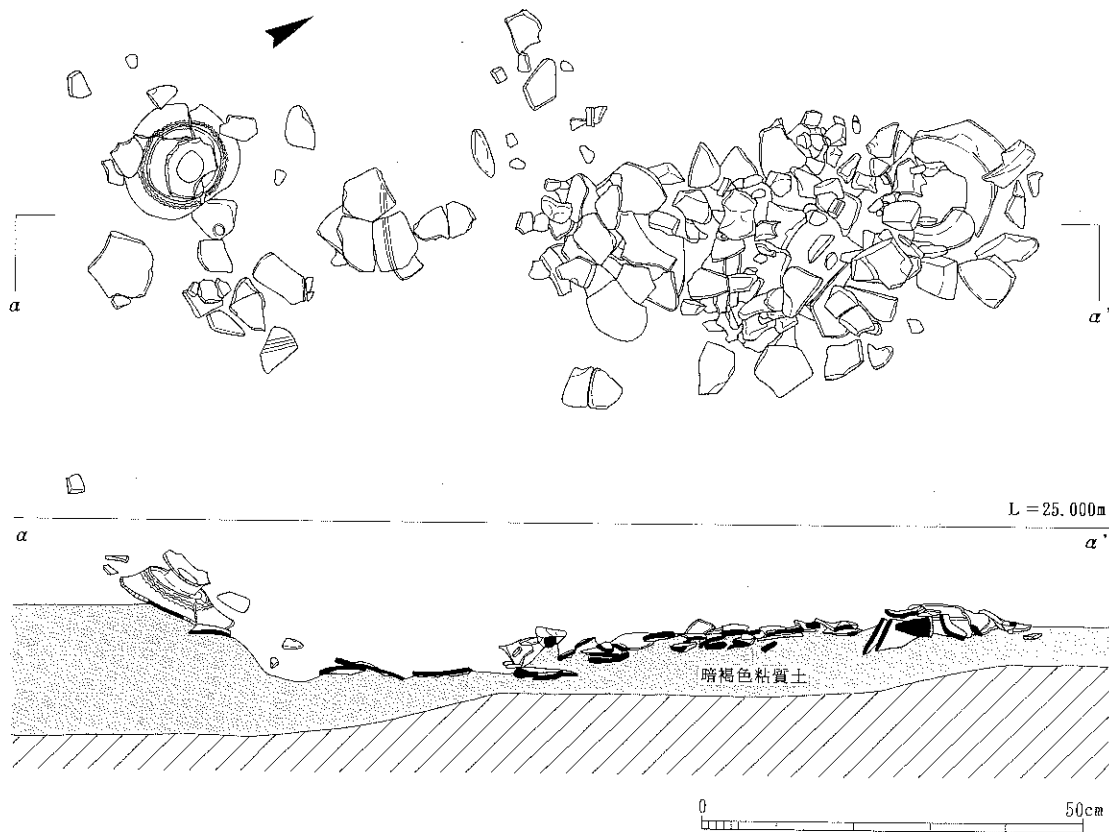


第20図 方形周溝墓 S X 201 全景（南から）

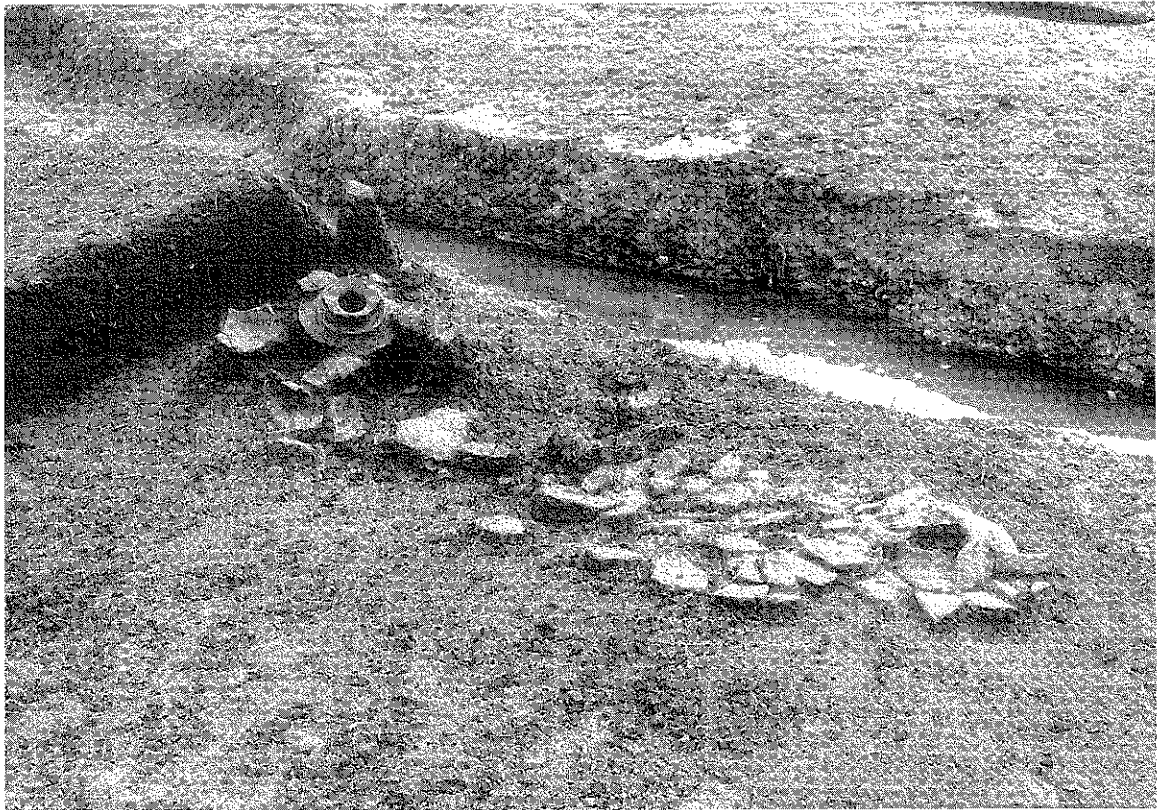
の形状も台形状に復元される。墳丘の規模は、墳丘肩の残存状況が良い南北間で計測すると、現状で8.5m程となる。東西の幅は現状で北端部で概ね5m、南端部で7.5mを測る。周溝部は、残存の良好な地点での検出面を基準にみると上端部幅1.7~1.9m程、下端部幅1.1~1.4m程、深さ20cm程となる。周溝の掘削は方形周溝墓S X 202のそれと概ね同様の在り方を示している。土器は、周溝内より主に3地点からまとまった状態で出土した。いずれも周溝底からの出土ではなく、周溝底直上の厚さ8~15cm程に堆積する暗褐色粘質土の上面から土器が出土している。そしてその上層の褐色土層（時期不明）が土器群を覆い尽くしており、この堆積以降は土器は外的影響をさほど受けることのない状態で埋没していたものと思われる。周溝東側でまとまって出土した二重口縁壺2個体については特にその傾向が伺えたため、破片一点一点の出土状況を逐次記録して取り上げ、遺物がどのようにして、調査時にみる状態に至ったのかという廃棄に至るその過程を解明しようと試みてみた。その成果については、付論で述べていく。

#### 4 トレンチ（第26図）

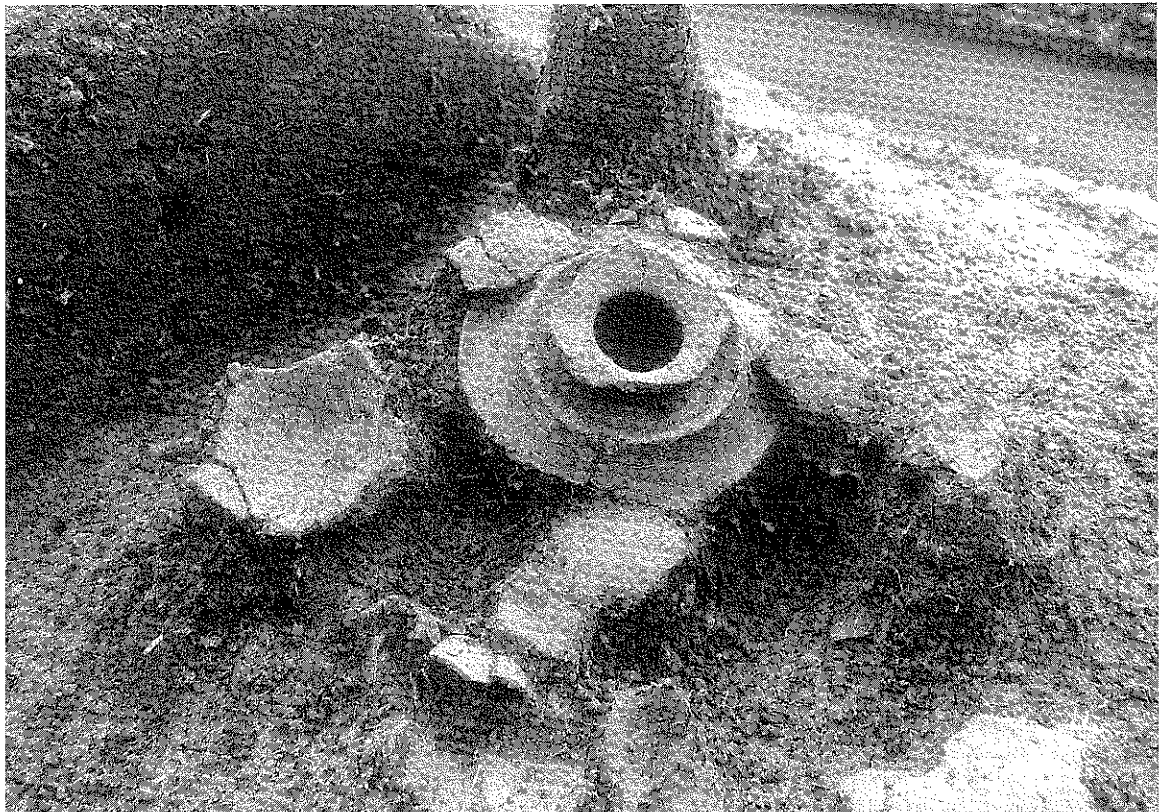
2 トレンチ西側に設定した4 トレンチは、2 トレンチで検出した方形周溝墓S X 201・202 周辺に墳墓が存在するか否かを確認する目的で設定したものである。4 トレンチと2 トレン



第21図 方形周溝墓S X 201東側周溝内の土器〔第32図2・4〕の出土状況図

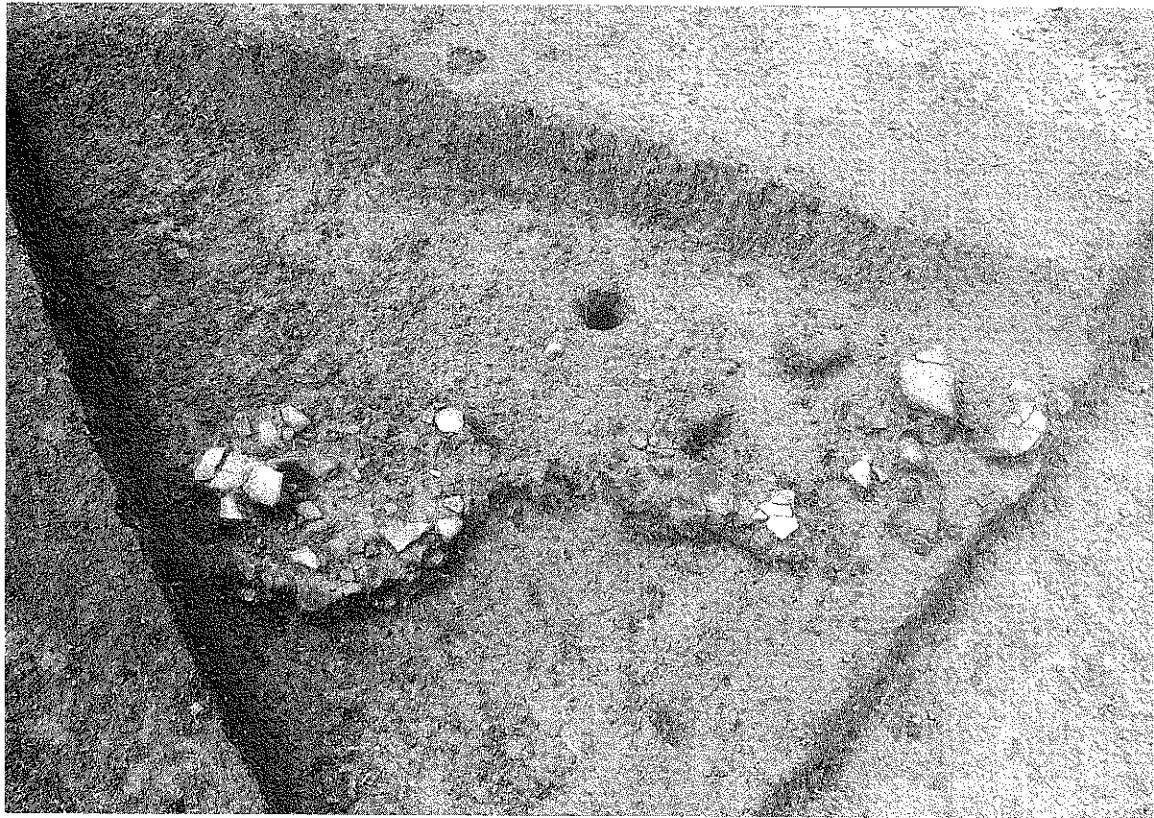


第22図 方形周溝墓 S X 201 東側周溝内の土器〔第32図 2・4〕の出土状況（東から）

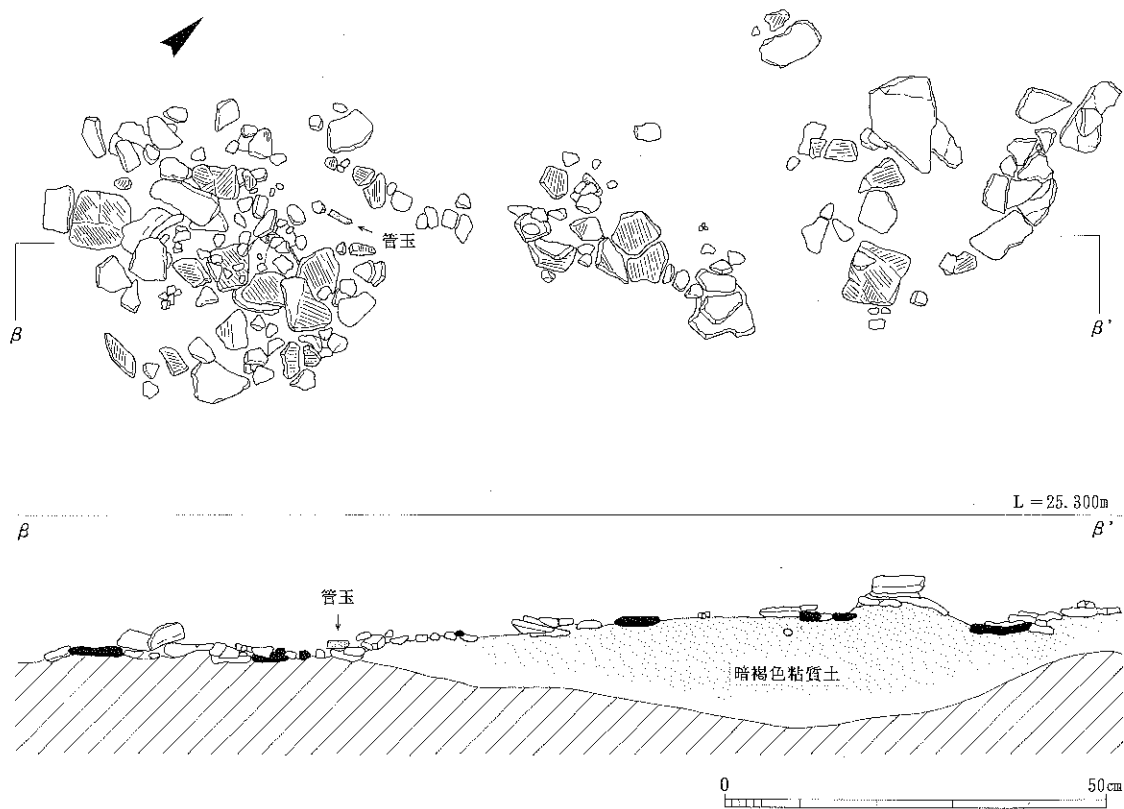


第23図 第22図の南側拡大写真（東から）



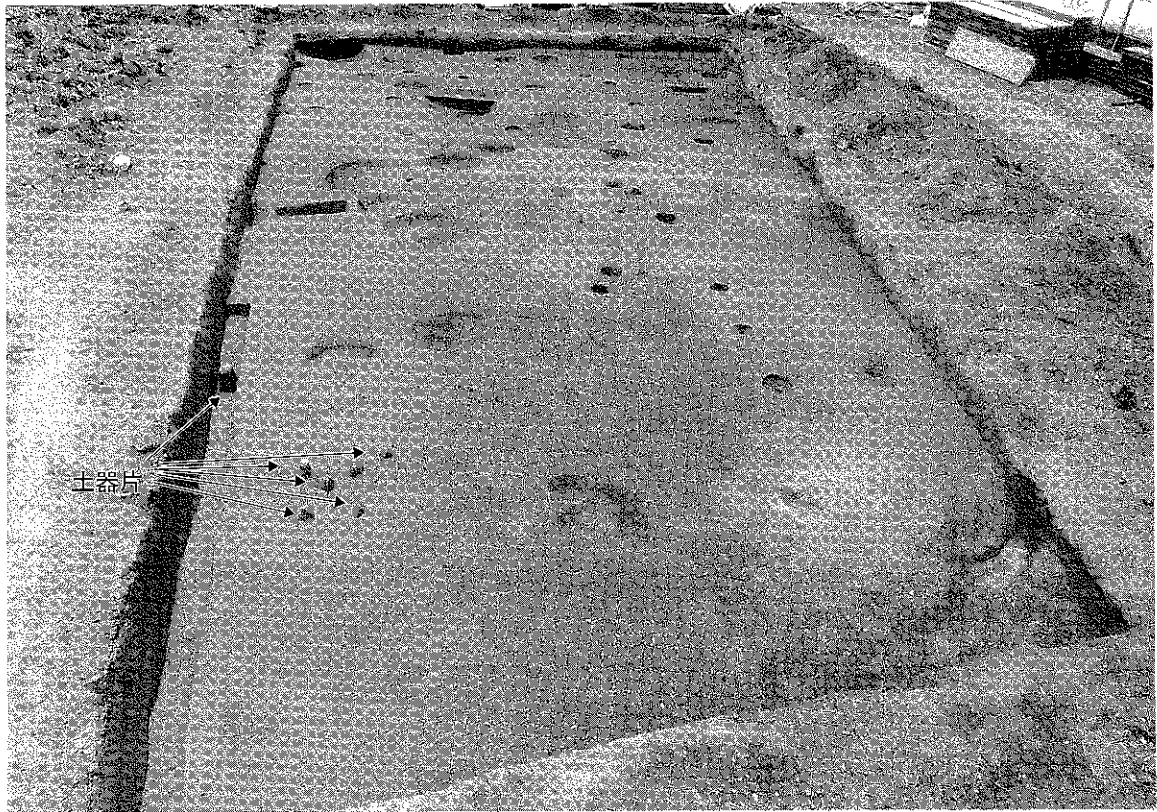


第24図 方形周溝墓S X201南側周溝内の土器〔第32図3〕の検出状況（南東から）



第25図 方形周溝墓S X201南側周溝内の土器〔第32図3〕の出土状況図



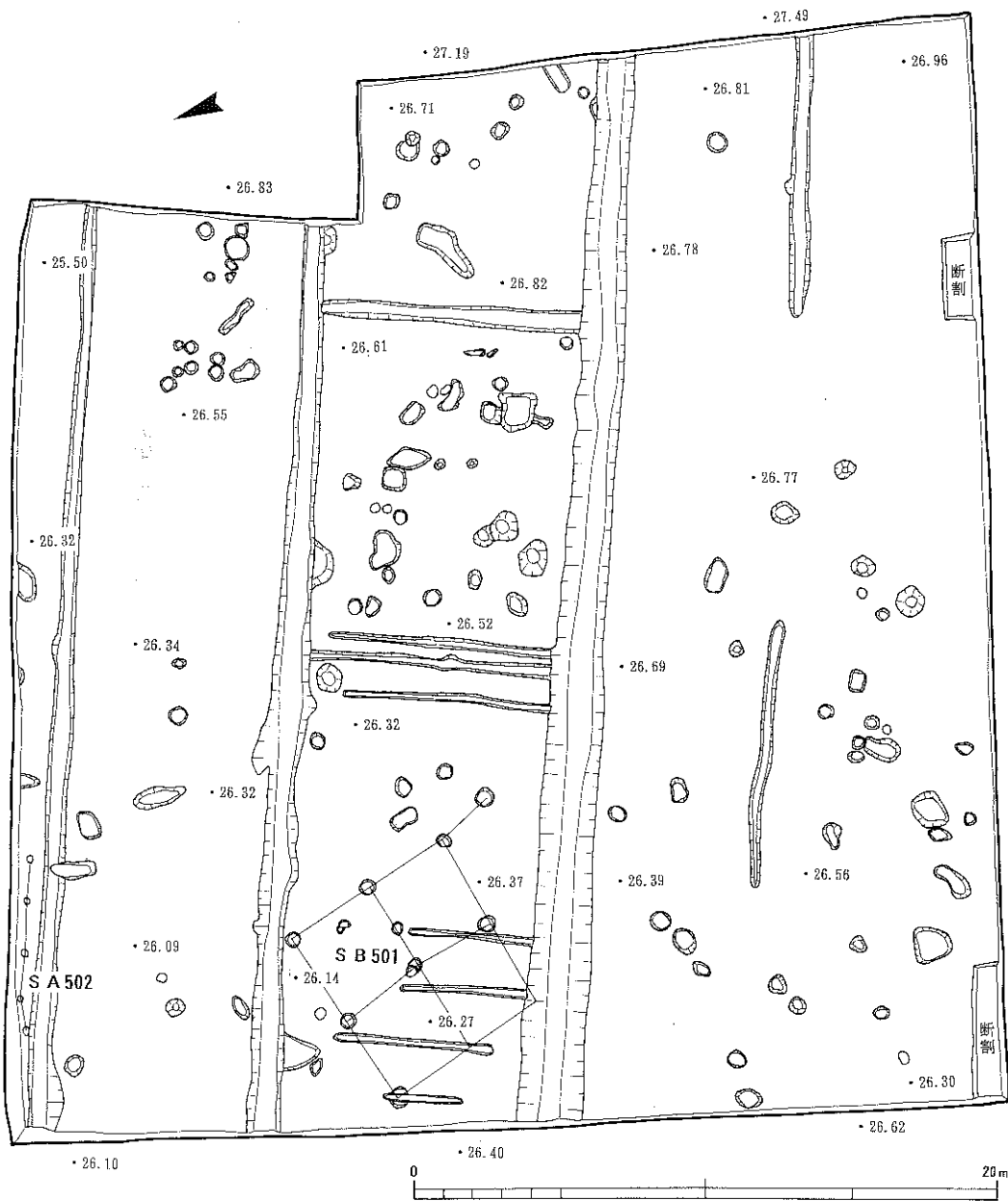


第26図 4トレンチ全景（北北東から）

チとの間には、南北に細長く長さ30m、幅10m程の陥没した溝状の痕跡が地表面で確認でき、その痕跡の内容確認のために一部を重機で掘削したところ、近現代の攪乱であろうと理解された。攪乱によって地面は大きく掘りこまれ、2トレンチでの遺構検出面の標高等からみて遺構の有無の確認は極めて難しいものと判断された。赤褐色系の地山は、表土を剥ぐとすぐに表れ、地表面下20cm程の浅さで確認された。土壌状の遺構は数多く確認されたものの、顕著な遺構は認められなかった。トレンチの北東部で、土器片が十数点程ある程度まとまった状態で出土した。土器出土地点に近接したトレンチ北東壁面での断面を観察すると、平面状では検出できなかったものの、ゆるやかに落ち込む溝状の窪みが確認でき、土器片はこの溝の延長線上に位置付けられるものと考えられた。2トレンチでの周溝の形状と類似することから、2トレンチの北東側にも方形周溝墓が存在していた可能性が考えられる。これを仮に方形周溝墓S X203としておく。方形周溝墓S X203の想定範囲の多くは、前述の攪乱内となるため明らかにしえないが、現況の空間から考えるとその規模は、方形周溝墓S X201以上にはなりえず、最も規模が小さい墳墓になるものと思われる。

#### 5 トレンチ（第27～29図）

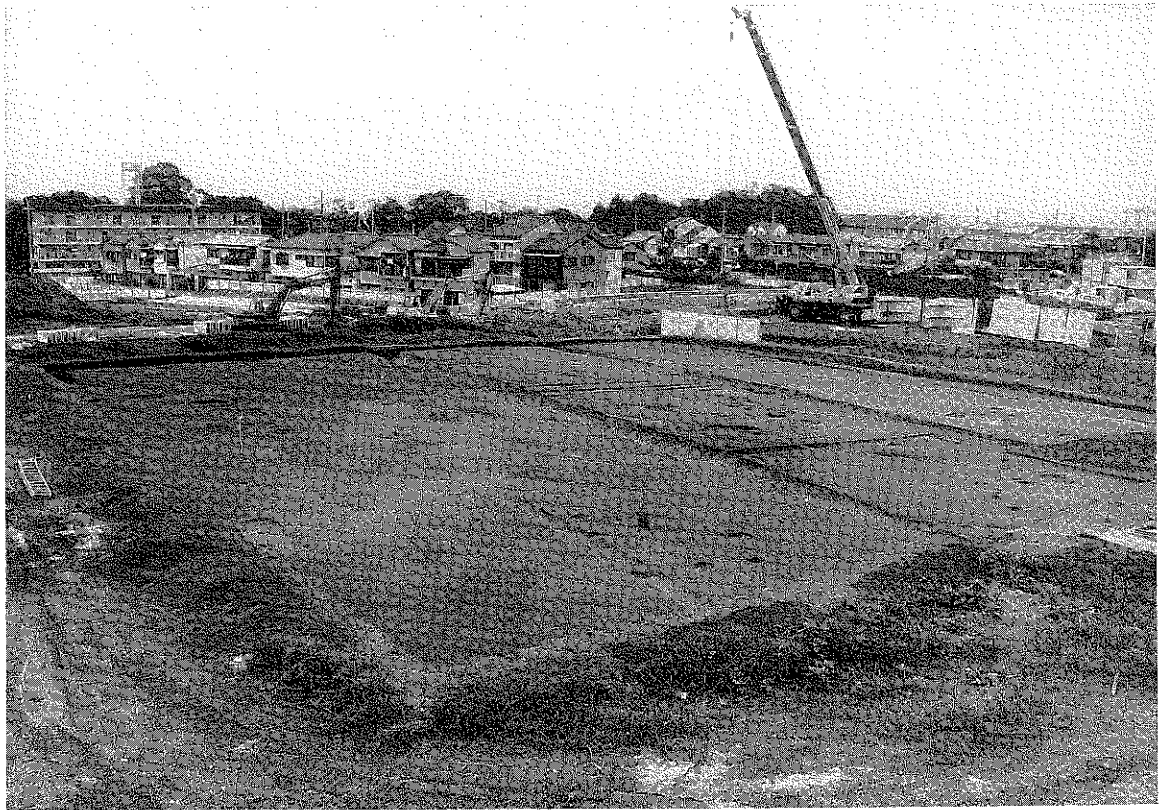
このトレンチは方形周溝墓が展開する丘陵突端の頂部になる。調査前の現状は、幅広い平坦地であった。地山面は浅く地表面下30cm程で検出された。出土した遺物の大半は、近代の



第27図 5トレンチ実測図

もので、一部に近世に遡る可能性のある遺物がみられた。検出した主な遺構は、掘立柱建物1棟、溝3条である。東西に走る3条の溝は遺物の内容から近代に掘削された時期の新しい遺構である。

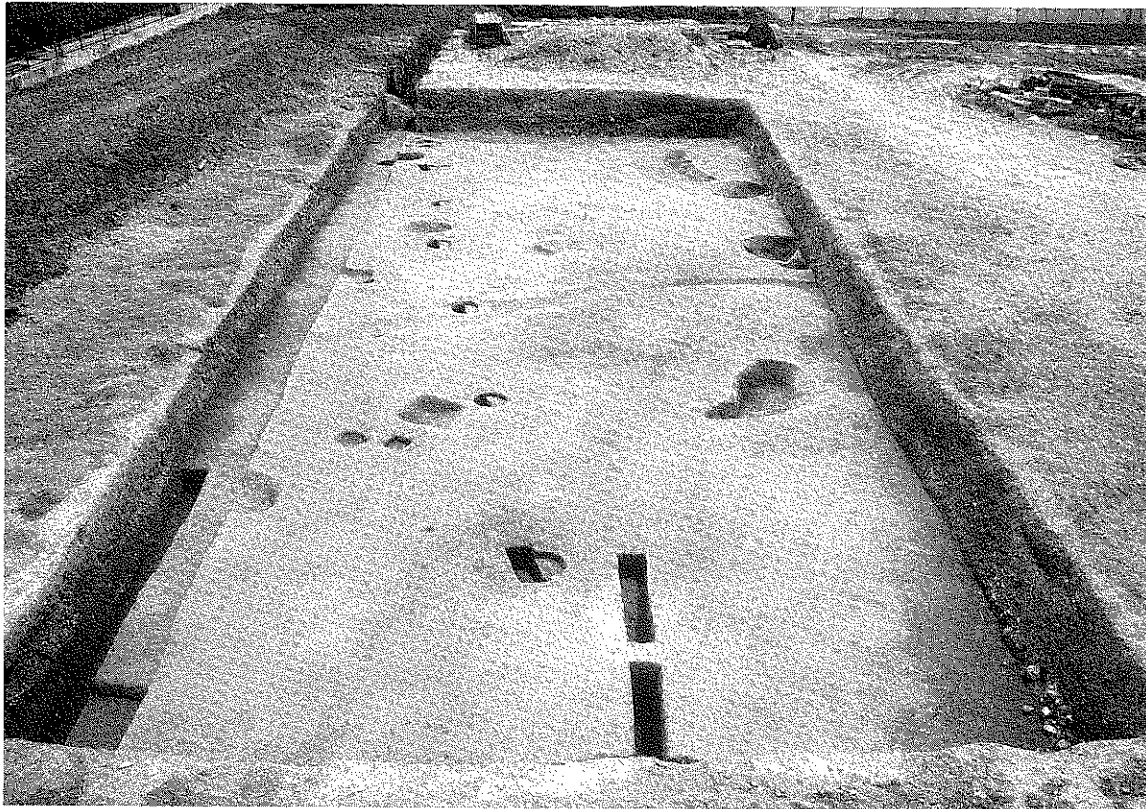
**掘立柱建物 S B 501 (第27・29図)** 2間×2間の概ね正方形となる掘立柱建物である。建物東側柱列の南延長線上に、この建物の堀方と状況的に類似した柱穴痕が1カ所あり、性格不明ながら、建物に関係した遺構の可能性が考えられる。堀方は直径40cm、深さは40cm程と建物の基礎柱のそれと酷似する。埋土はすべて赤黄褐色の単一土層である。この土質は平成7年度に検出した土壇墓の陥没埋土に極めて類似しており、遺物こそ出土しなかったもの



第28図 5トレンチ全景（南から）



第29図 掘立柱建物S B 501（北から）



第30図 6トレンチ全景（北から）

の、時代的に古く位置付けられる建物跡の可能性はある。柱穴痕は確認できなかった。便宜的に柱間を堀方心心間で計測すると3.1m～3.5mの数値となる。

#### 6トレンチ（第30図）

このトレンチは調査地北半部の谷筋に設定したものである。赤褐色系の地山面は現地表面から1.2m程下で確認できた。時期不明の柵列状の遺構が確認されたのみである。

#### 1トレンチ

6トレンチとともに調査地北半部の谷筋に設定したトレンチである。このトレンチでは、厚く堆積した河川堆積層がトレンチ全体で確認された。

#### 3トレンチ

このトレンチは2トレンチの東側に設定したものである。5トレンチから続く近代の溝がみられるのみで、顕著な遺構は見受けられなかった。方形周溝墓は東側丘陵上には展開しないようである。方形周溝墓は丘陵突端部に計2ないしは3基築造されたと想定される。

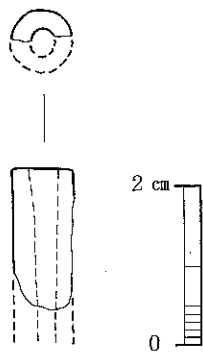


### C. 出土遺物

今回の調査で出土した遺物は整理箱にして約8箱である。主なものは2基の方形周溝墓から出土した土器類および管玉である。このほかに中世から近現代の土師器・陶器・陶磁器・銭などが少量あるが、ほとんどが細片化しており、包含層からの出土でもあるためここでは割愛する。以下に報告を行う。

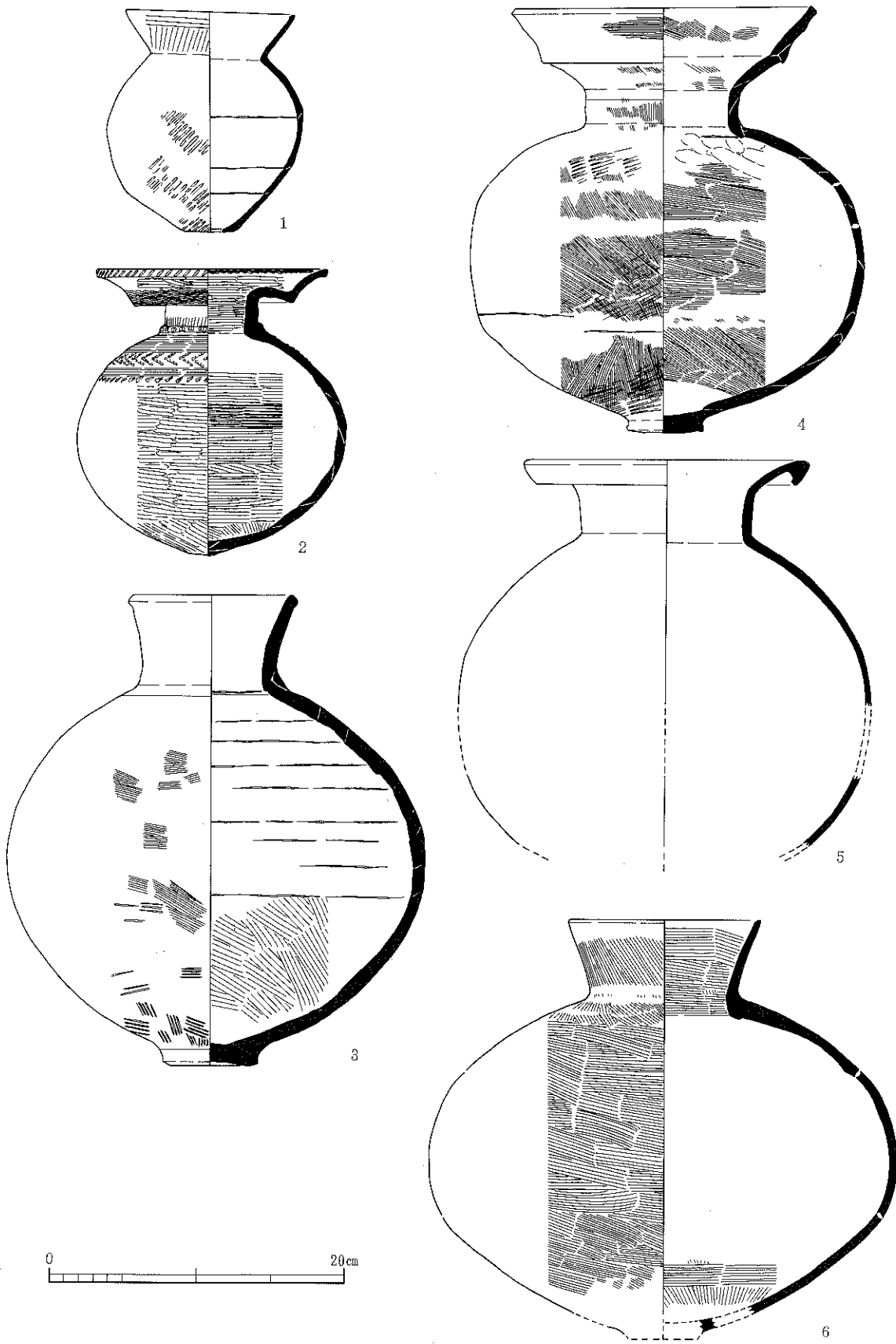
方形周溝墓S X 201 甕1、二重口縁壺3、直口壺2、広口壺1 個体がある。S X 201では出土した土器片のほとんどが接合しここに図化した土器に復したため、これらは概ね葬送儀礼時に廃棄された土器組成を保つと考えている。庄内期前葉に比定できる。

1は小型の甕で、口径11.4cm・高さ14.9cmである。口縁端部は内傾気味にやや厚みを持っているが単純口縁としてよい。外面調整は体部全体にタタキをとどめるが、口縁部には粗いハケを施す。内面はナデ。底部には焼成後に穿孔が行われている。また煤の付着はまったく見られない。2は小型の装飾二重口縁壺である。口径15.6cm・高さ19.6cm。S X 201のなかで最も精緻に製作された土器で、外面及び口縁内面には赤彩が施されている。口縁部には乾燥時に下向きにしたためと考えられるひずみがある。二重口縁は直立する径6.3cmの頸部からほぼ直角気味に広がり、やや外反して立ち上がる。体部はやや胴張りの球形で、底部は小平底を持つ。体部と頸部・口縁部は別作り後に接合されており、接合部には突帯が巡る。外面全面には丁寧なヘラミガキの後に、口縁端部に刻目文、二重口縁下端に波状文、突帯文、3点が1単位の刻目文、体部肩に直線文、3点2単位をくの字状に配した列点文、直線文、ヘラ状工具を三角形に押しつけた刻目文が施される。内面は口縁部・頸部にはヘラミガキが行われるが、体部にはハケ目が残る。口縁内面端には波状文が施される。3は直口壺で口径10.6cm・高さ31.7cm。口縁は単純外反気味に立ち上がる。端部は外面肥厚気味におさまる。体部はほぼ球形で突出平底を持つ。下半にはタタキ痕跡を残しており、甕同様に分割成型されていることが分かる。この後、ハケ調整で丁寧にタタキ目は消されている。内面は、下半円錐部には粗いハケが施されるが、上半部は軽いナデで仕上げられている。また、体部にはまとまって破片を欠く部分があり、焼成後穿孔の可能性もある。4は無装飾大型の二重口縁壺である。口径20.0cm・高さ28.0cm。口縁は、短く直立する径10.3cmの頸部から斜め外方に立ち上がり、その上面に擬口縁を接合して接合部に粘土帯を足している。外端面を持つ。体部

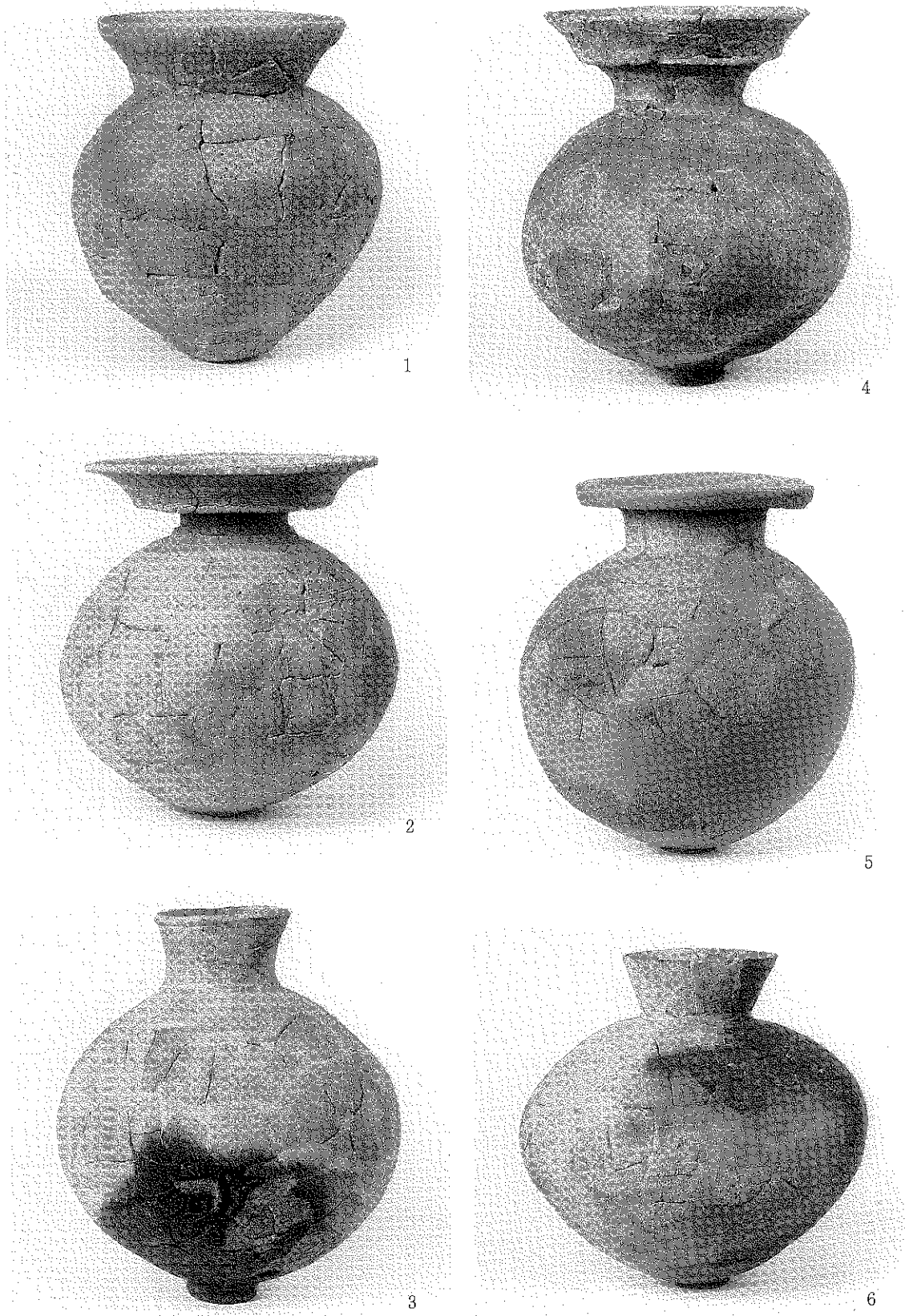


第31図 管玉実測図

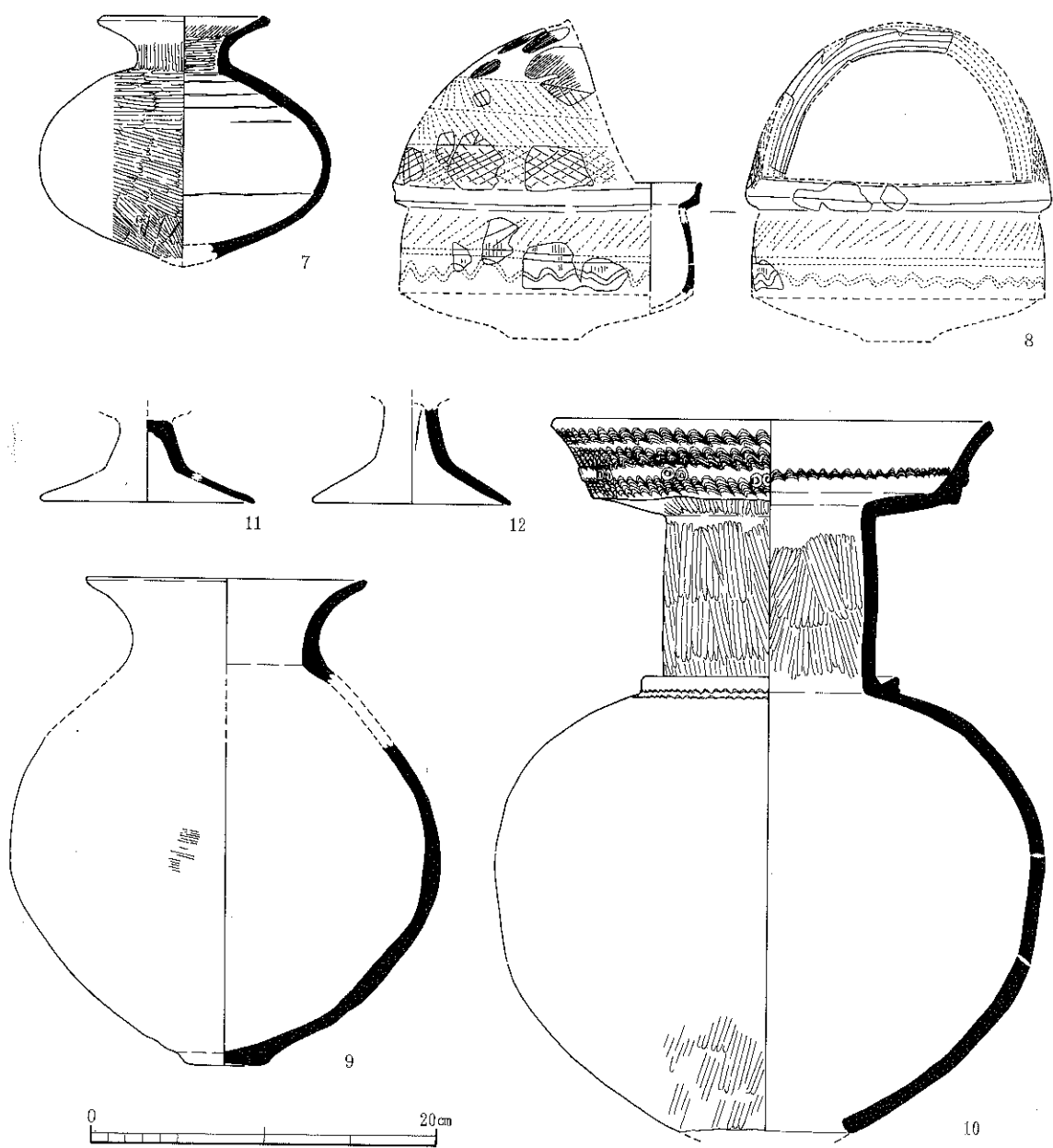
は机上復元を行っている。体部中央に最大径を持つ玉葱状の形態で、突出平底である。体部外面には、タタキ痕と円錐部での接合痕を残しており、分割成型されていることがわかる。内外面全体にハケ調整を残す。5は広口壺である。口径19.2cm。全体的に摩滅が著しく調整は観察できない。口縁は、直立する頸部から外反し、端部を大きく外面肥厚させる。体部は球形を呈すると考えられる。6は直口壺で、口径13.0cm・高さは28.5cmほどに机上復元できる。直立する口縁と玉葱状の体部を持つ。内外面全体にハケ調整を残す。土器類のほかに管玉が1点出土している。直径7.5cm、碧玉製。



第32图 方形周溝墓 S X 201出土土器实测图



第33图 方形周溝墓S X 202出土上器写真

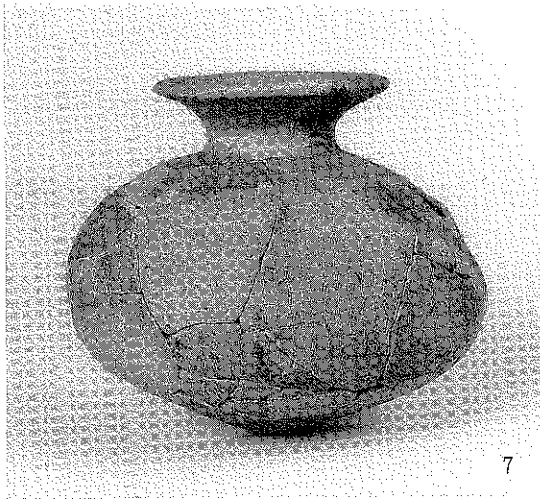


第34図 方形周溝墓S X 202出土土器実測図

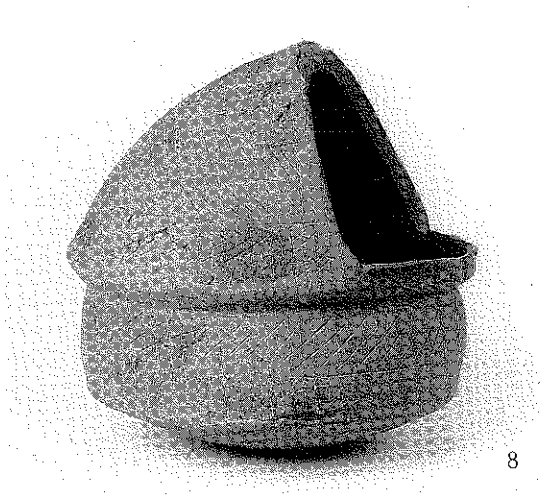
方形周溝墓S X 202 広口壺2、二重口縁壺1、手焙形土器1、高杯2 個体と接合できない破片が整理箱に半箱ある。庄内期前葉に比定できる。

7は小型の広口壺である。口径10.0cm、高さ約14.5cm。口縁部は直立する頸部から外方に広がり、端部をやや肥厚させる。体部は玉葱状で中央付近で大きく胴張りする。底部は小平底を持つ。外面全体と口縁・頸部内面には丁寧にヘラミガキが施される。上半部には頸部径に合わせるための絞り痕が見られる。この壺体部にも破片を大きく欠く部分があり、焼成後穿孔を行った可能性がある。8は手焙形土器である。今回復元土器中残存部が全体の10%ほどと最も少なく、机上復元実測を行っている。受口状口縁を持つ鉢部は、体部と底部との境





7



8



10



9

第35図 方形周溝墓S X202出土土器写真

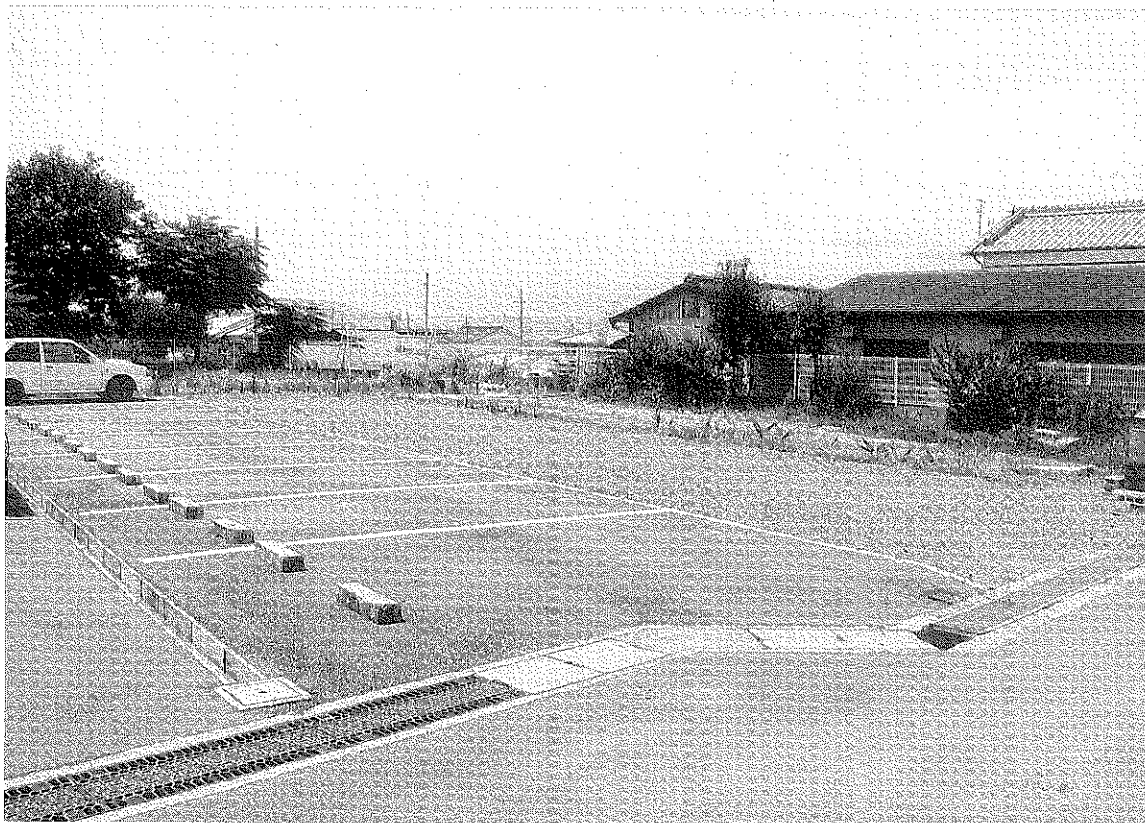
にわずかな突帯が巡る。体部にはハケ目を残したまま斜行文・直線文・波状文が施されている。蔽部も鉢部同様ハケ目を残したまま直線文・斜行文・斜格子文が頂部を除く全体に施されている。全端面は突帯が付加され大きく肥厚している。直線文が描かれている。9は広口壺で口径は16.2cm。全体に摩滅が著しく調整を観察することができない。口縁部はなだらかに単純外反し、体部は下半に最大径を持ち突出平底を持つ。10は大型の装飾二重口縁壺である。口径24.8cm。口縁部は長く直立する頸部から外方へ開き緩い角度で立ち上がる。ヘラミガキの後、波状文を施し、2個単位の円形浮文を付す。体部は最大径をやや上半に持つもののほぼ球形を呈すると考えられる。頸部付近には突帯を巡らせ2条の波状文を施す。焼成後底部穿孔が行われている。11・12は高杯の脚部である。両個体ともに表面が摩滅しており調整は観察できない。

## V 6 次 調 査

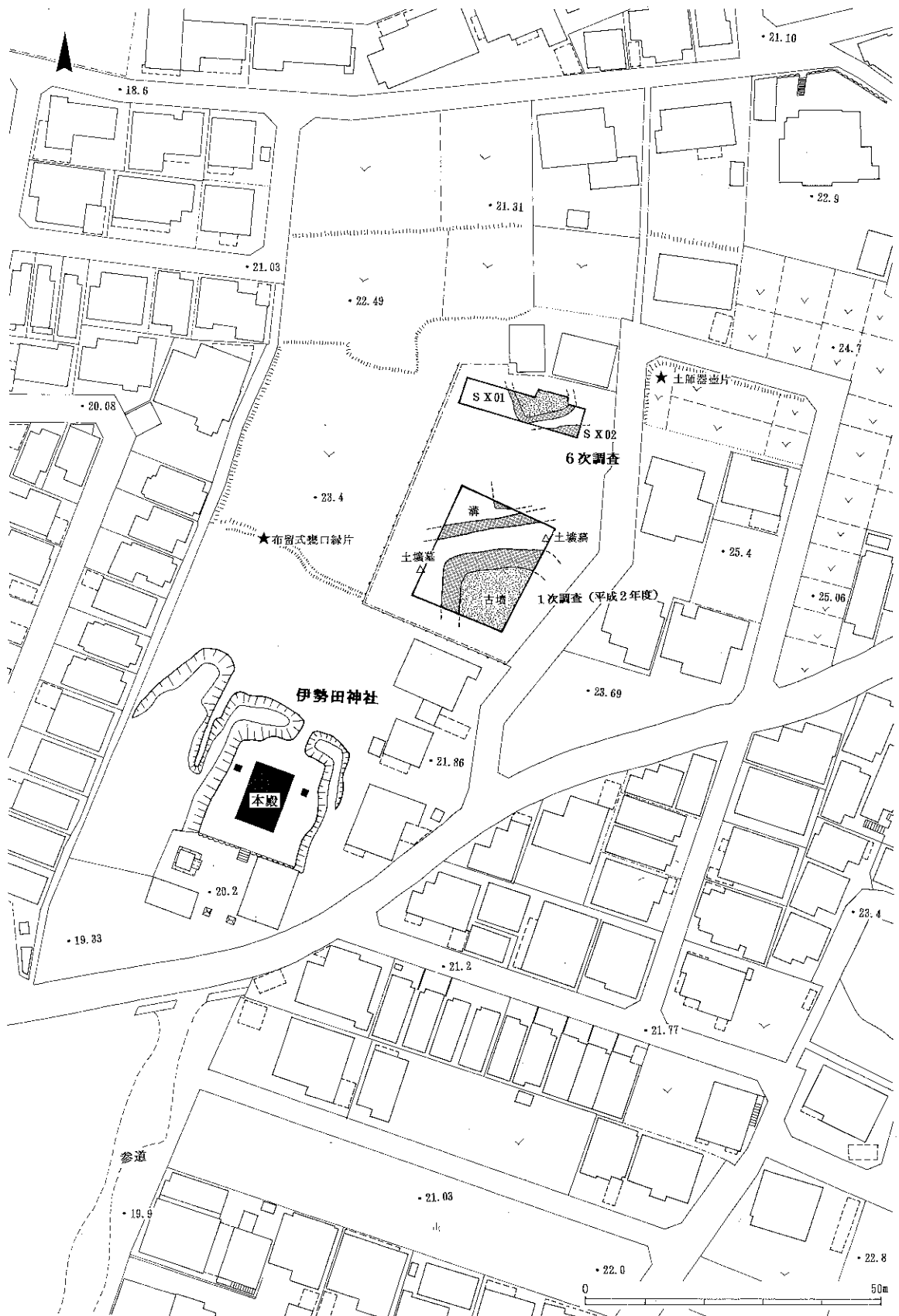
### A. 調査の経過

調査地は、伊勢田神社の北側、本殿から60m程離れた地点にあたる。標高は24.5m程を測る。調査前の現状は、南半分はアスファルト舗装の駐車場で、北半分は畑地であった。調査は後者の畑地で実施した。厚さ20cm程の耕作土を重機で除去すると、直下で赤褐色系の地山層があらわれ、この面で遺構確認を行った。トレンチは畑地の形状と同様の東西に細長いトレンチを設定した。トレンチ東側では「L」字状に屈曲する溝のラインが確認できた。地形や調査地南側で削平古墳が検出されていること等から、溝は古墳の周濠になる可能性が考えられた。溝の西側で須恵器の甕片が出土したため、溝は古墳の周濠と理解された。その他、トレンチ南東隅において、遺構の全容は確認できなかったが弥生土器を含む溝状の遺構が確認できた。この溝は方形周溝墓の周溝であろうと判断した。

遺構が完掘段階に入ってから、トレンチの位置図・平面図・土層断面図を作成し、写真撮影をすることによって記録を作成した。埋め戻しは、掘削土砂で埋め戻し、調査前と同じ状況に復旧した。発掘調査面積は結果的に110㎡となった。



第36図 調査前の状況（南東から）



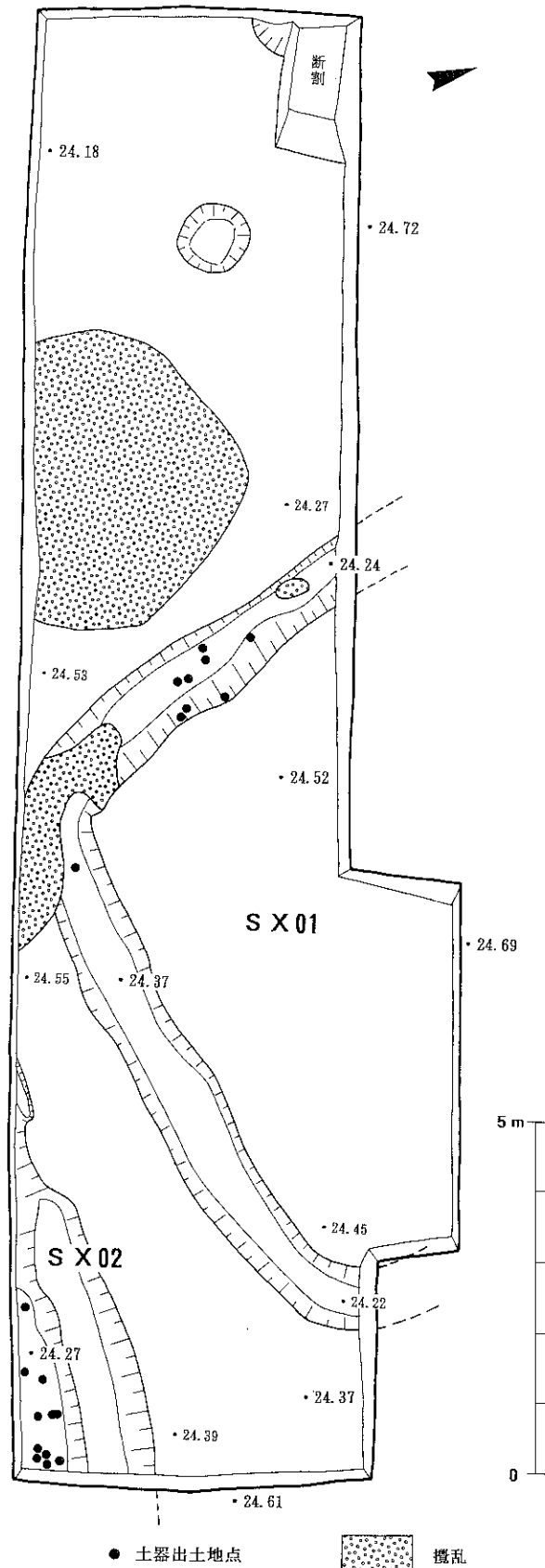
第37図 6次調査周辺地形図

## B 検出遺構

今回の発掘調査で検出した主な遺構は、古墳1基、方形周溝墓1基である。方形周溝墓については、溝が極く一部検出されたのみで、その評価はわかれるところであるが、ここではとりあえず方形周溝墓の周溝と理解して記述する。

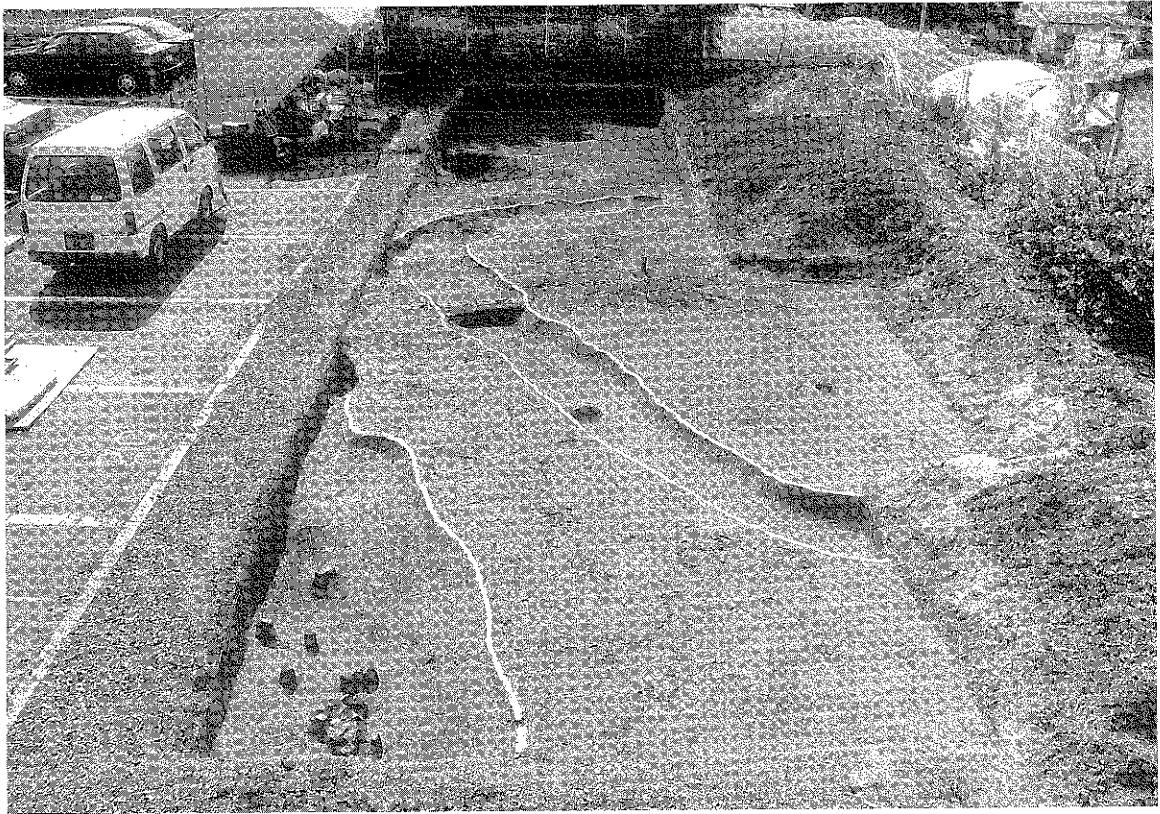
**古墳 S X 01** 調査地の南側で検出した方墳である。墳丘部はすでに削平され周濠のみが残存する。周濠は現状で概ね1mの幅があり、深さは10~20cm程を測る。濠底レベルは地形と同様の東から西に向かって緩やかに傾斜している。調査地内における周濠の検出割合は、全周のほぼ半分である。周濠より類推できる古墳の規模は一辺8m程である。その想定に基づいた墳丘部中心部を、埋め戻し時点で重機で掘削調査したが、何の痕跡も認められなかった。古墳の南半分にあたる未調査地域は現在公民館が建っているが、レベル的にみてすでに周溝すらも削平を受け残存してないものと思われる。遺物は周濠内の西北側で須恵器片が出土した。

**方形周溝墓 S X 02** トレンチ南東端部で周溝部を辛うじて検出した。周溝は詳細な計測はできないが、古墳 S X 01より深く、幅広い。周濠内から弥生土器が破片となって埋土の中層付近を中心に出土する。破片の状況からみて個体数は少ないものと思われる。



第38図 検出遺構平面図

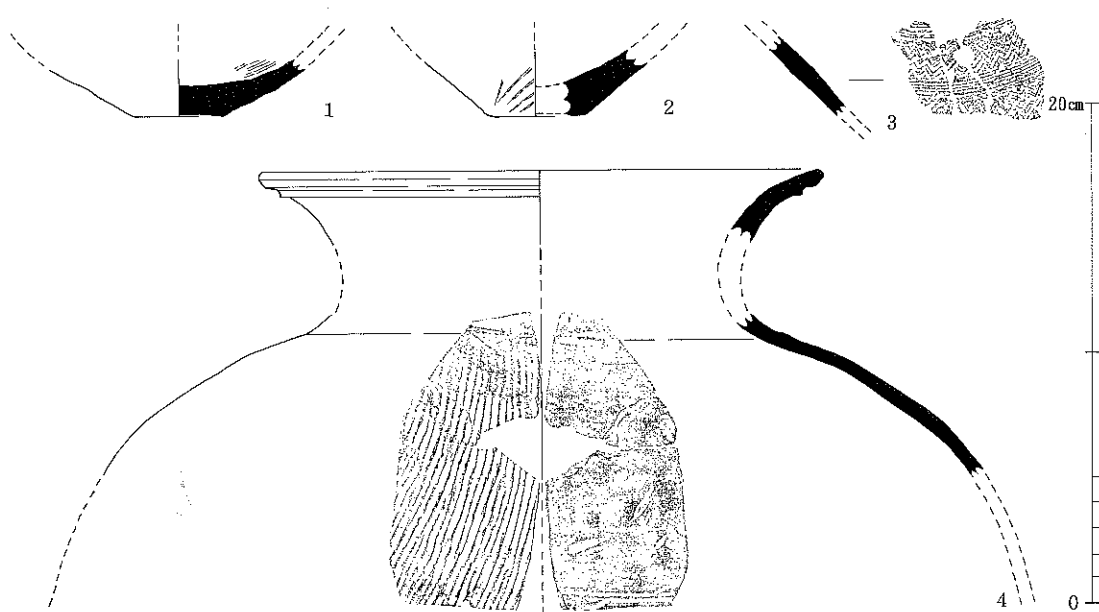




第39図 トレンチ全景（東から）



第40図 古墳S X01（北から）



第41図 出土遺物（1、2、3がS X02溝内、4がS X01溝内）

### C. 出土遺物

今回の発掘調査で出土した遺物は弥生土器・須恵器であり、数量的には整理箱1箱分と極めて少ない。出土遺物のすべてが、方形周溝墓・古墳それぞれの溝埋土からの出土である。遺物の残存状況は悪く、詳細な時期は判断し難い。以下に遺構別の出土遺物の概要を記述する。

**古墳S X01出土遺物** すべて須恵器甕の破片である。これらの破片は、状況的にみて1個体より成り立っているものと思われるが、破片それぞれの接地面は少ない。口縁部から底部までのパーツが概ね残っており、甕全体の姿を想定復元することができる。口径は推定22cmを測り、体部器壁は薄く4～5mmである。斜め上方に開く口縁端部は丸みをもち、端部下に1条の凸線文を一条作り出している。体部の調整は外面はナナメ方向の平行叩き目で、内面は同心円文当て具によっておさえた後にスリケシが施されている。同心円文叩き痕は、底部と肩部一列に集中して残る。古墳時代中期。

**方形周溝墓S X02出土遺物** 非常に細かな破片となって出土しているため、全体を伺うことのできる個体はない。遺物量は少量である。図化したものは3点である。いずれも黄褐色系の色を呈する。1・2は平底の壺底部であろう。内外面いずれも摩滅は著しく調整は不明である。3は壺の肩部から胴部にかけての部位であろう。外面には櫛描直線文と波状文が施文される。櫛描文は10条／帯で構成されている。弥生時代後期。

## VI ま と め

前章までに今回の発掘調査の経過、そして検出した遺構ならびに出土した遺物の内容について報告をした。ここでは、これらの成果を整理して本報告のまとめとしたい。

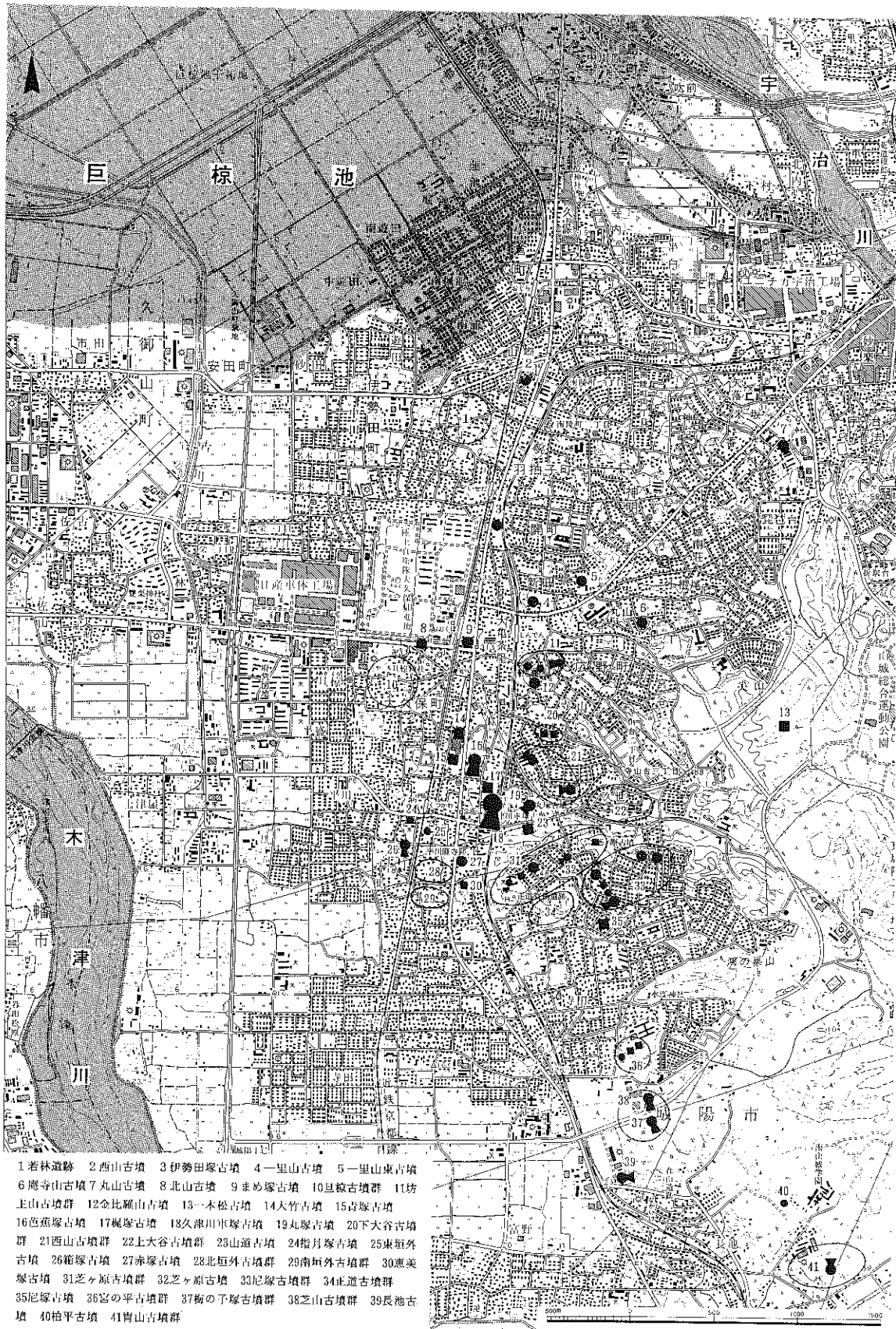
### A. 方形周溝墓と墓域

今回の発掘調査で明らかとなった注目すべき遺構は、5次調査で検出した庄内期の方形周溝墓2基である。南山城では庄内期の周溝墓が検出されたのは比較的珍しく、今回の方形周溝墓は古墳発生期における南山城の動態を理解する上で重要な資料を提供するものと思われる。

昨年度までの発掘調査は主に6次調査地の丘陵及びその付近で行われ、その結果丘陵上に弥生後期から古墳後期にかけての墓域が連綿と形成されていたことが判明した。この丘陵上には、未調査部分が多く、これまでの調査成果からみれば未確認の墳墓・古墳が相当数存在していることと思われる。今回の5次調査地は、その南側では小丘陵上で、そこにも墓域があり、方形周溝墓2基が築造されていたことが確認された。若林遺跡周辺では、この2つの丘陵以外にも小丘陵が派生しており、これらの丘陵上にも墓地が形成されている可能性は十分に考えられる。それらの丘陵には現在住宅が密集して建っており、墓域の全体的な様相は今後の発掘調査で得られる資料からしか明らかにはできないのが現状である。若林遺跡一帯での墓域の詳細な在り方をを行うには、いまだ資料不足でさらなる資料の増加が不可欠である。

### B. 集落の問題

これまでの若林遺跡の発掘調査は、遺跡東部にあたる丘陵上での調査が主で、数多くの墓が検出されたことから、当地域における墓域の一端が明らかとなってきた。この墓域を形成した基盤の集落については、同時期の資料はいまだ検出をみないが、遺跡の西側の調査で弥生時代と奈良時代の集落の一端を伺わせる遺構や古墳時代の遺物が出土し、少ない資料ながらそれらを概観すると、集落の時期的大変動といったことは想定しがたく、集落が連綿と展開し続ける比較的安定した地域とみた方が現段階では妥当なように思われる。集落の範囲は定かではないが、丘陵上に展開される予測も含めた墓の数は、今の若林遺跡の範囲内では集落はおそらくおさまらないのではないかと思われる。若林遺跡の西約300mにある井尻遺跡の発掘調査<sup>5)</sup>では、顕著な遺構は検出されなかったが、安定した地盤と弥生時代から近世にかけての諸遺物が少量出土しており、付近に集落の存在が想定されている。集落の存在は必然的にそれに対する墓地の存在を伺わせる。仮りに井尻遺跡一帯に住む人々が墓地を近く



第41図 久津川古墳群と若林遺跡<sup>6)</sup>



の丘陵上に形成したとすれば、若林遺跡付近の丘陵上になってこよう。若林遺跡という狭い範囲だけで遺跡の理解をするのではなく、こうした井尻遺跡などを含めてみていく必要があるろう。

### C. おわりに

以上、今回の調査成果を中心に若林遺跡についての整理を行った。若林遺跡の位置する「伊勢田」は、その地名の由来が伊勢の皇太神宮に付属した御料田に因むものといわれ、また式内社とされる伊勢田神社が鎮坐することから、この地域の重要性が述べられてきたが、それらは確実な歴史的事実ではなく、このため実証性の乏しい歴史が述べられてきたように思われる。ここ数年の中で若林遺跡での調査が多く行われ、徐々にではあるが「生」の資料が増えてきた。今回の調査では、古墳前期の資料ではあるが、「生」の資料が得られたことによつてますますこの地域の歴史像を復元する貴重な成果を挙げることができた。今後発掘調査が進展していく中で、より史実に近い歴史像が浮かび上ることを期待し、簡単ながら本報告のおわりとする。

(注)

- 1) 「若林遺跡発掘調査概報」『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第18集 宇治市教育委員会 1992
- 2) 「若林遺跡第2次」『京都府遺跡調査概報』第57集 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 1994
- 3) 「若林遺跡第3次」『京都府遺跡調査概報』第64集 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 1995
- 4) 「若林遺跡発掘調査概報」『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第31集 宇治市教育委員会 1995
- 5) 「井尻遺跡発掘調査概報」『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第32集 宇治市教育委員会 1995
- 6) 城陽市教育委員会小泉裕司氏より拝見させていただいた資料をもとに作成した

## 遺物の出土状況は何を語るか—周溝内出土の土器から—

### 1. はじめに

方形周溝墓の周溝から出土する土器は、墓上に供献されたものが転落したもの、あるいは底部や体部に焼成後の穿孔が見られることが多いため、何らかの祭祀行為の後に廃棄されたものなどと考えられてきた。従って詳細に出土状況を検討することによって、その使用形態から溝中に入るまでの過程が少しでも明らかになると考えたのである。今回の若林遺跡の調査では、S X 201の周溝東部より残存状況や検出状況の良好な、まとまった土器破片群が出土した。そこで、破片1点や接合可能な破片群ごとに番号をつけ、70回に分けて取り上げる作業を行った。さらに接合の際には、どの破片が、どの部分に、接合するかの確認を行った。

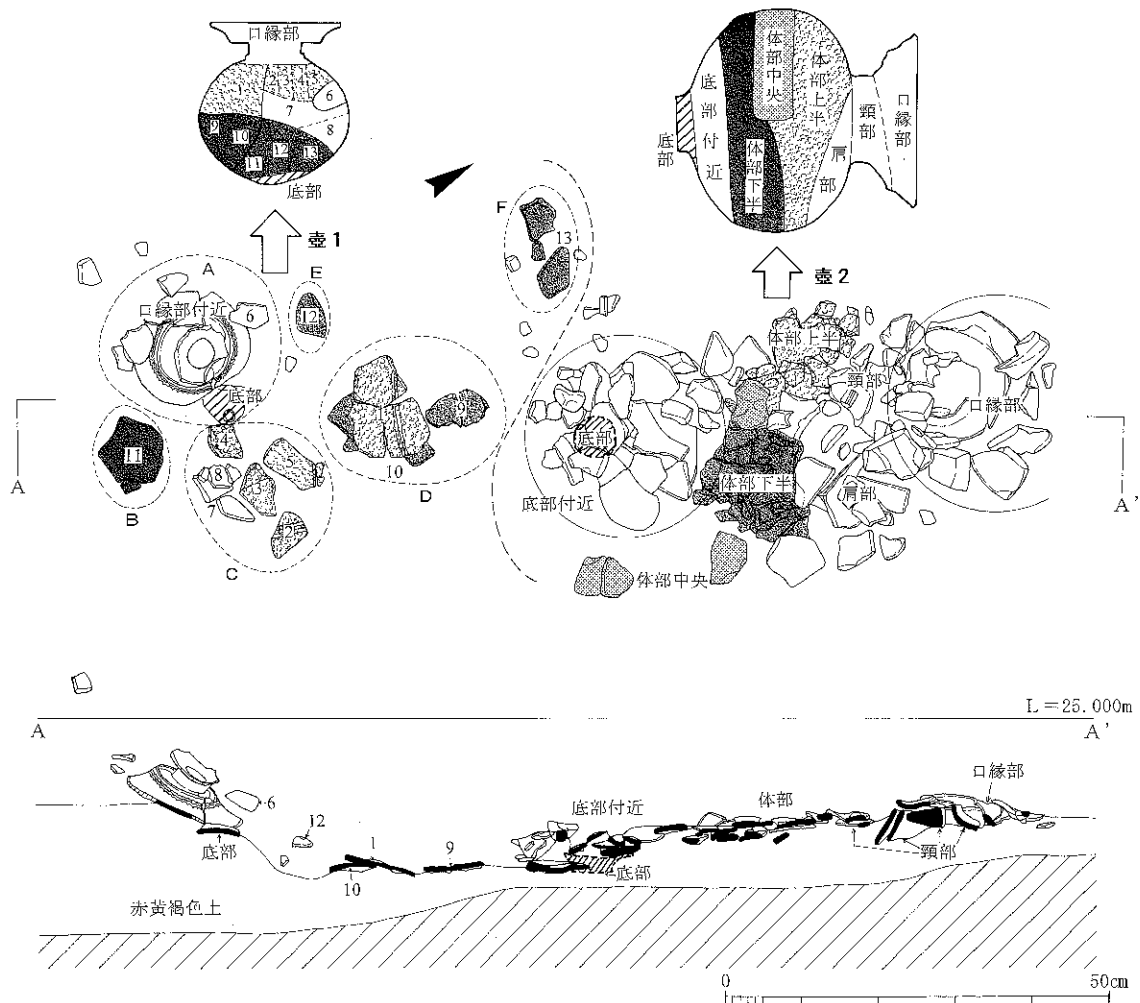
### 2. 出土状況と接合作業から分かること

S X 201 からは、周溝内よりほぼ完形に復元できる壺が6個体出土した。その中で、周溝東部からは2個体の壺（南側=壺1〔第32図2〕、北側=壺2〔第32図4〕）が出土している。遺物の項で述べられているように、壺1と壺2両者の調整は大きく異なるものであり、取り上げ時及び接合作業時に、両者を破片で区別することは容易であった。その結果、第43図にあるように、破片の散布状況が1個体ごとにかたまっていることが分かった。接合作業を行うと、両壺共にすべての破片が接合したが、壺1は体部が1カ所集中して大きく欠損しており、壺2は破片の残っていない部位が何カ所か見られた（第42図）。

S X 201は、近世以降の攪乱によって破壊されている箇所が多いものの、この周溝東部は幸いにも残りが比較的良好である。周溝の検出面から10~20cm下位で遺物が出土している点、周溝埋没後にS X 201周辺が攪乱を受けている点、遺物が固体ごとにまとまりを見せる点などから、S X 201を大きく破壊した近世以降の行為で、両壺が破損したとは考えられない。土圧によって破片化している可能性はあるものの、その位置的なものは遺物が周溝内に入って埋没していく時期から変化していないと考えられる。それでは両壺がどのように出土し、接合したかを少



第42図 壺1の欠損状況

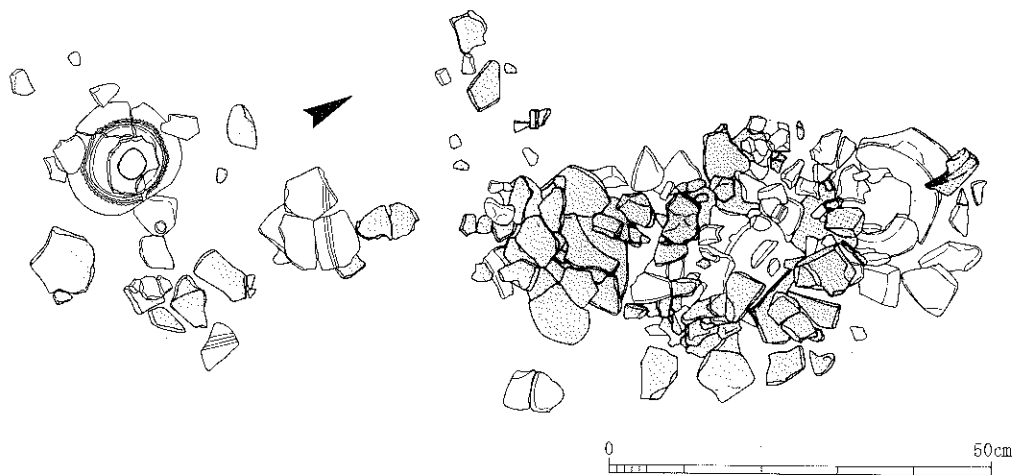


第43図 土器の出土状況及び接合結果模式図

し細かく見ていこう。

壺1 口縁部から頸部がほぼ完形のまま、口縁端部を下向きにして出土し、底部が口縁部のすぐそばに重なるように、外面表向きに出土している。体部は散らばりが激しく、接合状況より大きく6箇所（第43図A：口縁部・底部・6、B：11、C：2～5・7・8、D：1・9・10、E：12、F：13）に分かれて破片がまとまる。B・E・Fでは体部下半の破片が出土して底部と接合し、Cでは体部上半から中央の破片が出土して口縁部、及びB・E・Fと接合する。Dでは体部上半から下半の接合可能な一連の破片が、折れ曲がって内面同士を向かい合わせて出土し、口縁部と接合する。DはさらにB・Cと接合する。

壺2 第44図で示すように、底部の出土した付近で内面表向きとなっているものが多く出土し、外面表向きのものは口縁部から頸部付近に集中している。破片群の最北端で、口縁部が口縁端部を下向きの状態で出土している。頸部は、口縁部の下敷きになっているものや、口縁部上に細片化して出土している。体部上半が出土した地点では、破片同士の重なりが無



第44図 内面が表向きに出土した破片（トーン部）の状況

い。一方体部下半が出土した地点では、表面に小破片が目立ち、その小破片を取り除くと一枚の大破片が現れる。底部付近が出土した地点では上下二重に破片が重なる。下に位置するものは、細片化していたが、接合時に一体化した。その底部付近の下より、底部が底面をほぼ水平にして出土している。ところで、以上のような破片が上下に重なっている状態は、同じ側の底部周辺と体部が、破損時に重なって生じたものであって、例えば壺を横向きにおいてそのまま上から押しつぶされたものでない。これは出土状況が内面表向きで出土しており、内面同士で向き合った状態（つまり外面が表向きに出土した状態）で重なり合っていないことから推測できる（第44図）。

### 3. 考えられる廃棄状況

次に、これらのことより廃棄状況のケースを考えてみる。

A 遺物が周溝に入る時間的な経過は2パターン考えられる。

- a. 周溝が掘られてすぐ（周溝底部直上に遺物が張り付く）
- b. 周溝が掘られてしばらく経った後（周溝底部と遺物の間に土が入る）

S X 201の周溝東部以外の部分で周溝の両肩が明確に検出された地点を見てみると、地山まで掘り込まれている。若林遺跡は東から西に向かって丘陵が下がっていくことから、比高の高い部分に位置する周溝東部も地山まで溝が掘り込まれている可能性が高い。しかし後世の攪乱が激しく、溝の両肩が不明であるため、ごく一部の断面による確認である。それによると、黄褐色で礫を多く含む地山上に赤黄褐色土が堆積し、この赤黄褐色土中より遺物が出土した。壺1はレベル的に口縁部付近にかけて高くなるように傾斜しており、壺1のD1・9・10付近と壺2の底部付近が低い。従って土壌の掘り込まれている可能性もあるが、周囲の状況よりそのような掘り込みが見られないことから、周溝の底に土層の堆積がみられた後、遺物が入っていると考えられる。



ただし、遺物を上から覆う土層は赤黄褐色土と酷似しており、やや赤みが強いことが異なる点であって、周溝を最初にうめた土層と遺物を覆う土層の時間的な差がどれほどのものか不明といわざるを得ない。

B 遺物が周溝に入るプロセスは2パターン考えられる。

- a. 人為的に割る
- b. 割らずに完形のままにしておく

前述しているように、壺1に関しては、体部に大きな欠損部が集中してみられる(第42図)事から、壺に対して人為的作用が及んでいることが考えられる。壺2に関しては、接合の仕方や部位の位置関係、破片が大きくまとまることなどから、完形に近い形で周溝内に入りしており、壺1のように体部を壊し、一部を持ち去るといったような行為は行われていない。

C 遺物が周溝に入るプロセスは3パターン考えられる。

- a. 周溝の外より人為的に投げ入れる
- b. 周溝内に人為的に置く
- c. 周溝外(墳丘内外)に置いていたものが、自然に落ちる

S X 201 では、周溝の北・西・南部からも遺物が出土している。周溝内に自然に遺物が転がり込むには、それぞれの地点で周溝から距離的に近いところに遺物が「置かれていた(廃棄されていた)」ことが前提となる。

以上3点について考えてみたが、そのことよりわかる廃棄状況のケースを上記のパターンに従って指摘しておきたい。

壺1 周溝が掘られて一定時間経過後、周溝内に入る。ただし、壺を周溝の内では壊すのが問題である。

壺2 周溝が掘られて一定時間経過後、周溝内に入る。ただし、第43図にあるように、あたかも横位にねかした壺がそのまま押しつぶされたかのような位置関係で破片が出土しており、周溝外で人為的に壊されたものが自然あるいは人為的に周溝内へ入り込んだ状態ではない。また、周溝外に完形のまま置かれていたものが自然に周溝内へ落ち込み、土圧で破損したという状況は、体部の破片が内面同士を向き合わせた状態で上下二重に重なっていないこと、壺1と破片が混ざり合わないことから疑問である。さらに、破片の散らばり方から、大きな力が加わって飛散した状態ではないと考えられ、完形に近い状態のものが溝内に持ち込まれ人為的に壊されたと考えられる。

#### 4. 小結

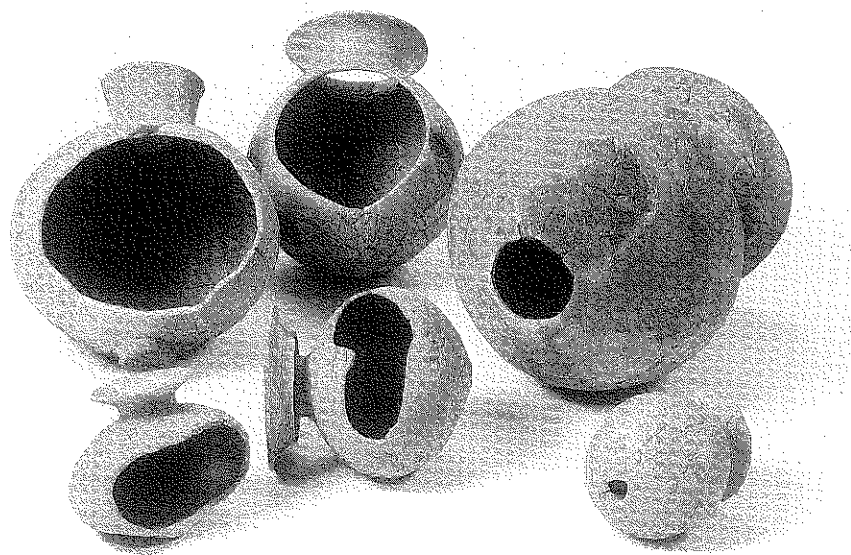
わかったことを消去法的ながらまとめておきたい。

- ・壺1は小形で、体部の装飾やミガキを施すこと、さらに朱塗りであることから、壺2と比

較して特殊な意味を付加された壺である。

- 壺1と壺2は破片で混合した状態で出土しておらず、意識的に分けられて人為的に周溝内へ入れられた。
- 両壺共に、溝の底から浮いた状態で出土しており、墓の構築直後と遺物廃棄時の間に一定の時間差を有している。
- 壺1は体部を人為的に破壊している。特に、その口縁部の残りの良さと比較して、体部以下は、壺2のように部位の元々の位置を保っているとは考え難い。観察上剥離痕は見えないものの、人為的に体部を壊しその一部を周溝とは別のところへ持ち去ることによって、壺としての役目を失わせている。
- 壺2は完形に近い状態（体部の一部持ち去りが見られない）で周溝内に持ち込まれているが、その過程において人為的に壊している可能性が高い。

このように近接した状態で出土したにもかかわらず、両者の異なる性格、同じ性格は、モノに対する当時の人々の意図や使用法の違いを、遺物の様々な状態より（可能性として）伺い知る事ができる。それは、墓で行う土器を用いた人為的行為の復元に近づくことになると思われる。さらにはその遺物が出土した遺構の役割を知る手がかりにもなる。ただし、筆者の勉強不足で、「壺が溝内に人為的に持ち込まれたことと、壊す行為を行った事」の可能性のみを述べたに過ぎない。周溝内の遺物が、どのような経過を経て入ったかを考えるなら、周溝墓の「溝」としての性格にも大きく関わってくることである。そして、周溝墓で行われた人々の行為や動きを見ることができよう。



第45図 欠損する土器たち

## 抄 録

ふりがな	わかばやしせいせきはくつちょうさがいほう							
書名	若林遺跡発掘調査概報							
副書名								
巻次								
シリーズ名	宇治市埋蔵文化財発掘調査概報							
シリーズ番号	第40集							
編集者名	浜中 邦弘・吹田 直子・松村 英之							
編集機関	宇治市教育委員会							
所在地	〒611-8501 京都府宇治市宇治琵琶33番地							
発行年月日	西暦1998年3月31日							
所収遺跡名	所在地	市町村コード	遺跡番号	北緯	東経	期間	面積	原因
若林遺跡	宇治市伊勢田町 大谷22 他	26204	85	34° 52′ 86″	135° 46′ 84″	970212 ) 970813	3,000㎡	共同住宅 建設
	宇治市伊勢田町 若林14-1 他			34° 52′ 99″	135° 46′ 76″	970630 ) 970722		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
若林遺跡	墓	古墳時代	方形周溝墓 古墳	須恵器 土師器 管玉				

(宇治市埋蔵文化財発掘調査概報第40集)

## 若林遺跡発掘調査概報

発行日 平成10年3月31日

発行者 宇治市教育委員会  
〒611-8501 宇治市宇治琵琶33番地  
(0774) 22-3141 (代)

印刷 有限会社 新進堂印刷所

表紙・巻頭写真2・遺物  
・・・寿福滋氏撮影



